山家集類題

全

へ4
2100
K

刹へ門 弾 巻 2/10

西行上人歌集
山家集類題

明治四十年四月廿四日 藤野澄

東京帝国大学図書之印

東京帝国大学図書之印

昔はこえをそろへむ人のうゝなる
るたまたにうゑてたれとゝはなくも何
らしを大和まをハ佛はたゝ
をりなふへくれとゝはのゝ
うもゝ学をゝ
ぬなりしゝ
つゝる鶯の風

こゝねがの紙をやわらむしてかゝな
乃あゝ紙ゆゝしゝ花をぬひもち
すゝて針目ゝゝるゝゝひ乃こゝゝ
人らハ日とゝむしえよねそゝゝは
きんやそ世ゝしてゝ条のむしし
まつゝゝゝれるゝさくあ事て矣
回ゝくなゝぬゝ我友柳高ち

ゝたゝしあゝゝ世しゝゝ紙書
律乃もとむるゝ小紙すゝて可
をゝゝくゝゝよゝきゝ為てこの以て
祈れゝゝ文仏世ゝこのゝ乃乃年
に年ゝ有けるかゝ物をゝゝハ世
志利世ひろゝ社ゝるむ乃史を世
くゝゝ志のゝたこのゝやゝさん世ゝらゝ

なるむとよ[illegible]て九、つ[illegible]
流さ[illegible]よかくハその[illegible]の秋ら
はるそ[illegible]ける

凡例

一 山家集ハ世ふりてくゝ人まゝあるれハこれをもて
いつもとゝ[illegible]きまゝにあらそひぬされと板本をこゝ
うけて流[illegible]てハ[illegible]ゝ[illegible]りかゝなんこれをたゞて
持て[illegible]ちりくゝ元長さうせちふ[illegible]もくゝ
ゝさわゝひゝたゝふ一冊一冊にあたらうゝ
ゝてゝゝゝを新の歌とをくゝて一帖ゝをゝれ
今の山家集のゝゝたゝとゝ板ふゝらゝく
ゝまゝてのゝゝにうん

一 今の山家集西行と人のゝ海をのまつゝ
ゝけゝとゝさゝゝゝ

正平とよばれたれい今の集とあるを見るに一本あり
それとてこれもの新訳い書集あるをれいう家仮名
もとのまゝ浄土りとおりたもたゞ仮名
一或人秘蔵して世に出ぬ所ゆえ出ぬ集といふあり
ちさやしらぬ官家の御蔵本とこそあるを他夫本の出
あ集文六年ちりたゞ会せに意夫四あり叶夫本の
集い校本にいるれ代年こるる一方みてなるくるも
まちこうりされも彼見のくりてこれをそなな
きふしもいられとりとりし合せてうとるふ
ちりてこれ代られた出家集をつきて生ずべし
一集中の年物拝ふいるるもまこれまを夫四あり

嗣出の文本につくるふるをべし
一近代の識者此人の年と新破せしあるを新あれるく
もみもりれ諸し陳体とうたるるの中にくるよ
ガりもあられをられ明るはの校の多れるいく
年ともあられをりまを家人い叶年と校の年しをりをられも
詞をに西へまるとて校物と考いまれ哀傷
の部ふ出をりのるるひ代てあまるりこれる大本 脱
正ふくいし引をへし
一集中の年特字あまるひみて年意漏れるとんゆるも
ありくを愚うるくをいうしもを年たるを年もあるる
これるの考をのをるふ出るを沿りしくをもかゆをて大本

[illegible]

一今原本とせしも閑句ありまさのんうとうるふうたう
つゞけより一首をえめすとうるわるもありそうたらひい
彼是本をふくしたくてあったらえめ

一今の集て歌のあるいかなるもたりまき新代中ちる歌
をしてあるふ出代ゆちる歩月雪花をとるり
ちこゆるありていをそうこれに出せる題しんと
あるけをうをて行くれの歌とこるふまつけやこい
ゆるのくの保例をもちむ一脚とせんとうして
月深の所ふをうをて集をれまと出めをうり
うを歌とをかいをくの他意をたうをんをの

をのりあれいをり

一道世の住い住所いうれをけるをるるをるる
にをうをいをを所ふ住まれをるをうるれをを所をて乃寺
も羇旅の部にくいへ是をる

一をちのくの住をうを四国をうをの脱洩も一をひのをを
ゆくけををの元を国をにをうへ出をををれいをを
つをををを本体をに出めををんをてんたまををる

一生涯のを家集千数千八百
五の千一首社のあふを生せ
八首をりをふ類歌ををたの

文化九年 壬申十二月

松本柳齋識

類題上・巻

春之部　三百五首　夏之部　百五首　秋之部　二百八十六首
冬之部　百九首　離別之部　七首　羇旅之部　百九十首
賀之部　十四首　計九百三十六首

同　下巻

恋之部　二百八十首　雜之部　二百六首　哀傷之部　九十三首
釋教之部　八十六首　神祇之部　廿一首　計六百三十二首

通歌数千五百六十八首

藤原潔氏道愛之記

類題上巻目録

春部

○年内立春雨　○深山立春　○山庭年内立春　○浪華立春
○初春逢坂山霞　○立春　○立春朝の子の刻　△梅霞　△春曙　△霞　△若水　△山家
○立春日　○元日雨　○春きて花雪ふる　○歌ふる　△里霞雪　○静夜清師僧正　△残雪
○歌ふる　四首　△氷解　△小松引　△雪解　○子日　六首　△元日子日　△子日に松を送る
△子日霞　△若菜　八首　△若菜速摘　△雪中わかな　△わかな摘菊　△老人わかな
△ゆきとけわかなつむ人　○海辺霞　○ふるの里の春霞　△ふくのさと霞

○雪ふりてつれなきたてまつること
○世ふるまつ
○ふるさと
○ふるさと 二首
○梅
○山里の梅 三首
○藤の梅
○古の梅
○ちるふる花の雪ちる
○ちるの梅
○菴の前の梅と
○いせのうつしてたの梅
○雨中 雪
○花の谷に雪
○梅ふる雪
○梅ふる雪 二首
○ふりたれい 四首
○雪にたてまつると述
○ふるさと 四首 △谷の雪 △梅ふる雪 △雪と雪
○うくひすなる雪の谷
○ふるさと 四首 △四谷の谷の雪
○深山の初春
○山里柳
○柳ふるる
○雨中柳
○水辺柳
○早蕨
○雪の春雨
○山里の春雨
○雪の春雨

○きゝもとめて 四首 △聞の— △花の— △聞の— △花の—
○雪中四月 二首
○山家春子
○春月あかしけるふ
○春月
○花と雪
○花と雪 二首
○花と雪 △花の— △花の— △花の— △花の—
○花と雪 △花の— △花の— △花の— △花の—
○花と雪 △花の— △花の— △花の— △花の—

[illegible]

○鶯の花ちる宮の帰雁

[illegible]

○花のちる野ち[illegible]

[illegible]

△花雪ちる

△花雪ふる

△[illegible]の花

△[illegible]の花

△[illegible]の花と[illegible]む　四首

△白雪花ちる

△風おの和花

△華の[illegible]花

△花のちる[illegible]

△[illegible]の花数多り

○遠山桜花

△[illegible]と[illegible]む

△花[illegible]

△花の[illegible]

△[illegible]

○雨中落花

○夢中落花

[illegible]

○頻[illegible]　二首

△山田の蛙

△江の蛙

○菫　二首

△[illegible]

△わ[illegible]

○花代に月とゝ[illegible]

○春風の画[illegible]春の[illegible]

○[illegible]なゝんとゝ[illegible]

○花の[illegible]

△[illegible]の花数多り

△[illegible]の花[illegible]

○歌[illegible]　△他人の[illegible]に[illegible]

○花代[illegible]十五首[illegible]

△花の[illegible]

△花と[illegible]む

○百首[illegible]花十首

△花の雪

○[illegible]山の[illegible]

△[illegible]

△[illegible]

△[illegible]

○風落花

○[illegible]

○[illegible]

○花の[illegible]

○前代

○かゝ[illegible]

△[illegible]の蛙

○頻[illegible]　二首

○[illegible]

○かきつばた　○山吹　二首　△きゝのふつき
△山吹井のほとり
○伊勢ものがたりに海士の養はれ居
○三月晦日　二首　○三月一日ごろ書かるゝ

夏部

○題しらず　△更衣　○夏ぬれば卯の花　△山居初夏
○夜郭公　○水無月の忌　二首　○社頭卯花
○春ぬれどしらぬ郭公ときゝ　○待つ　△待時つ　三首
○雨中待郭公　○郭公とまちてあかす　二首
○人しれずなり　△待郭公　○ほとゝぎすなりぬれば郭公の初音とゆめ
○不尋閑子規　○雨中郭公　○夕暮郭公

○山寺ぬれ時鳥　○時鳥と　△初時鳥　△一聲ときく
○時鳥の声入首しらるゝ　△夜一聲ときく　△花橘ふ一聲ゆめ入首
○百首歌の中郭公十首　△待一聲　△月一聲　△山ふ一聲
△夜一聲　△待一聲ゆめ　△尋一聲　△ゆめて聞まし
△月ふ一聲　○郭公と二首　△暁一聲　△深山一聲
○入月海月に山里ふまゝりく立ゆくとゆきもとゆく
ゆ待ゆりしらしくの月にうゝる夏しふ
○入日さゝぬとゆきしりるゆ事ふ　○さるとゆりてくの月
ぬうしけるゆ事ふ　○ゆ郭ふ中院にあるゆ所入
ぬゆゆふ夜のちりけるうゝくゆて二首　○入日ふゆへくの月ゆ
ゆるれかてゆゆゆゆゆゆゆゆふ　△ゆゆのくゆゆゆ
△六月五日の郭公　△ゆゆくゆゆゆ
ゆ　二首　○郭公　△ゆゆゆゆゆゆゆゆ
入月ゆゆゆゆゆゆ

○五月雨　△江の入月哥　△雨だれ哥五　△篠の入月哥　△小田の入月哥　△古々の入月哥　○六月哥　千十六首

△池　△水　△山田　△夏月　△夏月　△門　△江　△舟　△舟橋　△沼　△傳　△傳　△傳

○草花露重　二句　△女郎花し
○霧中草花　○行路草花
○草花時と得たり　○草花道とさいきる
○悲西入道と草花の婿哉　○草花
○鄙しさは　二首　△沈のうたくさ　△夜草のくるる　○薄路すがりて志賀
○古籬荻蓋　○人々秋の千十首　△陣秋風　△陣蓋花
△陣虫　△義風　△山鹿　△秋の雨　○秋の雨　△秋夕蓋　△秋義　二首
△山月　△蓋月　△庭月　△暮秋
○山里にて秋暮れてみたる　△嵯の蟬　○四家嵯夕　二首
○鄙にて　△秋夕蓋　○世に家の秋の夜　○世に暮てみたる
△夕蓋　△風夕虫　△陣蓋　○陣虫
△野夜虫　△田園虫　△花虫　△夜虫　△虫夕蓋　○獨園蟲
○深夜園蓋　○故々虫　○雨中虫
○田家に虫と聞　○夕に道の虫　○物くるくる
○草花時と得たり
○草花道とさいきる
○草花
○薄路すがりて志賀
△陣秋風　△陣蓋花
○秋の雨
△秋夕蓋　△秋義　二首
○四家嵯夕　二首
○世に暮てみたる
○獨園蟲
○雨中虫
○物くるくる

れしも菴の花近うせとや　○俗人に行くくと為て庵に草
をのきふせとやて　○秋に未に松虫と鳴く　二首　○十月初り
山里にまうりける小菊に雪の降ふをれは　○物て初りとき
○船中初雁　○夜小入て厂と聞　○厂蓋遠
○霧中雁　○霧と雁　○鄙しに　△風おて
○暁の鹿　○夕蓋に鹿　○田庵の鹿
○逃居て鹿を　○人と為てまとのまりけふ鹿の行くれて
○小倉の麓て行くを小鹿の行くと鳴く　○鹿　△夜のうちに一　△京の一
△夜一　△夕一　△里の寄　○霧の蓋とへり
△山里一　△夕蓋　○霧の蓋
○山家霧　○鄙しに　△山寺寄　○嵯蓋に陣て鳴
生駒て大和と為て行く蓋　△嵯胡寄　○したくの里て

雨雲月　○松の落葉もり僅ふ月のひかりと　△三月

○入日新うくれるまに月はいとにさす入れて　○久月を待

○雲間くる月を待　○間くる月を待　○八月夫夜

△山――――△川――――△依月命と晴　○くすわるす夫夜

△こゝろの月　多七首　○霧月を踏つ　○名残月　△信濃月　△明石

○浦夜月ところ　○月沈のとてらん　○沈る月　○沈る月

○月沈の氷にみちり　○海辺月

○月ひとと遍照寺ひとく　二首　○月荒草花　二首　○月荒野花

○海辺明月　○月荒野花　○月荒女郎花

○月無無花　○月荒萩　○月荒女郎花

○月荒藤　○月荒紅葉　○月荒鹿

○月荒虫　二首　○月家月　○歌ひて　△月夜通

○松の木のまもり僅ふ月とてひとつてきて通とけとい今ふ紙

○旅宿月とひと　○旅宿月　三首　○月ふ遠くを

○月荒ひと友にひと　○遠ひるひふこもりて知ひりけるこのひと

月れ行きーひる　○ひと行方に来ひ月と就ひるに　二首

○春月に来りもけるふ者もり月わひひ夜なりそれひ

○月ひのれりふのひり　○月おにひと世ひ

○月にひ女ひ世のと遠ひるふ六首　○月お遠接　○歌ひて　△依月晴命

○月　△夕月夜　△月おひ世　△待月　△くすわる月　△俗の月

△俗の月　△山月　△月ひ世　△月ひ世　△月を雪　多

十三首　○月浦ひまもひ夜ひふ　△月出山　△青の月　△風ふ月

△月おひ世　△山月　△荒倉月　△ひ々月　△月燈夜

△月ひ世　△嶺月　△祇月　△紙月　△州毒月

△月故屋　△朝月山月　△月ひ月　△月ひ月　△月ひ世　△ひひの月　多

四十四首　○題ひて　△ひひ月月　△月仏雪

△ひ世月　△谷月　△ひひ月月　△月仏雪

△ひひひ宿の月　多十一首

○百首千中月十首　△待月　△浦月　△沈月　△月前述懷　△月前述懷　△月お風　△月前述懷　△月前述懷　等

○九月十三夜　△月前の菊の露に映る　△月燈の半にまゝれり

○獨用樓夜　○蘭里樓夜

○月前の菊　○菊　△菊の露　△菊の風　等　二首

○月前の菊　○菊花盛て菊花の御遊

○覚雲河間梨と菓の獨言　○歌て　△燈時雨

○紅葉未遍　○霧中紅葉

○山家紅葉　○紅葉

○紅葉を原に首　○賜り給る恵に萬代紅葉西白うり給る

○寂蓮寺野小行て山の紅葉を　○歌て　△秋時雨　二首

○燈の末てに編みこもりて　△門前の秋　△山寺の秋　△一一風　等六首

○終夜燈と行り　○歌て　△秋の末て寂然寺の

て末て前に花て末て花て末て　○秋の末て寂然寺の

冬部

○長安の夜紅葉を　○時雨　△あまの見る里

○山家時雨　○閑中時雨　○題て　△夜時雨

○落葉　△あしの庭　○曉落葉

○月お落葉　○流上落葉　○水上落葉

○落葉紅葉　○落葉紅葉　○落葉

○夢花野紅葉　○山の紅葉　二首　○題て　△岸の紅葉

○冬風　△冬の風　△冬の風　○水に寒草

○枯野の草　三首　○山の枯草　○野の枯草　双林寺

○氷面山水　○流上氷　○氷筏とり

○雲とのれくくまの奥て行り給ふ梅の氷てあまてさかりられい

○冬　△冬　△行　△行　△迫門　△河　△湊　○題て　△待冬

○月のれる草と雪と　二首　○三月ばかりの冬月　○庭上冬月
○山家冬月　二首　○舟中霰　○深山霰
○梅ばかに霰のたらしる　○題しらず　△山家霰　二首　○冬ゐ寺ものさびし中ふ
△初雪　○題しらず　△ふるの雪　○夜初雪
○庭雪埋月　○枯野雪　○雪道を埋む
○雪埋竹　○にはの海ひろうして家閑居見雪　△家閑居見雪
○山居雪　○雪朝倉友
○雪ゆゑ霊山をとりて眺めて　○社頭雪
○賀茂の御神楽に御門の内裏にて侍ふ
くらふ竹のつかひ雪ふりそくこと　○雪ゐ寺ものさびし
△山雪　△家雪　△山家雪　△山雪
△雪ゆゑ花　△閑居雪　△ふるさとの雪　○題しらず　△山雪
△ふるさとの雪　三首　○百首寺中雪十首　△拾雪　△湊雪　△山里
△梢　△大原　△雪途情　△沈良雪　○大原寂入の御所に
△閑居　○雪途情　○炭焼の煙をはへまるくきりたのもてまるもりくる人の絶へ雪降り
○雪に居うつもれて見んうきて面白うりけるを今もきてふとしみん
とをひ出てんけるを行て鹿の分てとりくるとみん
○冬寺十首　△山家冬月　△冬ゐ月　△沈の氷
△みうらの雪　△山家煙　△浦の雪　△山家雪　△浦の氷
△山家煙　○鷹狩　○雪中鷹狩　二首
○月前家雪　○山里冬深　○山里冬
○冬ゐ月ものさびしき中ふ　△冬山里　○題しらず　△山家嵐
△山風　△三首　○山家歳暮　△山家風
○東ふかくて人と年ゐ暮
にもとをくくるすゑ　○年ゐ暮ものさびしき都なるくれゆくとり

はるかに〇△紀家集者 △雑和集者

○はれうきこゝとしせゝ △業平歌集

離別部

○あひしりしりそめしかのまちのくまりそめふ別乃千ちもゝ

○ちはやふるかみなれしりそめしに遠く隔りもゝちはて所さ

ゝくるかなしきまくてをけるふ和業しりそめとんさまり

くゝ行つるうゝ〇ゝ行つるかれの未代に古亭てゝみそ

○遠く隔りふゝ五行りそめふ遠けの別とそゝとゝ人ゝゝ行ふ

○年久しくあひあをたりそめる同行ふ枝まゝ遠く隔りして

ゝゝ行ふゝ行ゝゝ行ふ行ゝゝ行ゝゝ

○遠く隔りそめるゝゝありけふ荷院のお荷ふまゝり

ゝりそめ人ゝ別けるゝつゝまゝりそめふ

○回れつゝの桜乃芳そめゝとゝゝそめゝ行ゝゝ

けそ ○ゝゝ せゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝいゝゝけそ女房六角殿

羇旅部

○須磨ゝ行そめ清の坊ふゝ人ゝゝゝゝ行ゝふ

ゝゝ薄風生けりそれい ○ゝ不陽ふまりたりそめふくゝりそめ人

九月晦りふゝそれへのりそれゝゝゝゝゝゝゝゝ

○ゝゝ 大ゝ女房 かゝ ○ゝ不陽出ゝ京へ向りまゝてきて

古人のあれうれ山さり長ひさりさる意海月しの行へ又うさりさ
○うしうし　なすすく　○八月つきのはしさりさみ白門へまうさる
しうある様うあに秋風楽しとしてこの月はまさ也
○新院さまのさまみ出さりまうさるふ使さ付て女房はして
より御言　六首　○山里にまうさ行さるふ行の風の柔ふ
まうらさ笑されい　○世とのうれさうふ行けるへ入うと
にまうりて後世入つとをうさうつもむきうして
○題さうれ　△まあ庵風　△世間者　○海月主旅宿　○寒夜旅宿
○旅うつさ映像とやさ　○旅はいうさ　△月の千　二首
○四国はうさ旅はしうさて仁和元年十月十日のよ於舟ふまうて
○歌うます　△うさうさ月の　△まさのうさ　○うち門とさうさるさ　六首

△△猶舟　△うつの　△うさうさ井
発網　△紡うさて　△極狗舟
ふうさて者と出て　○天王さへまうさるさにいとはうて旅宿
○天王さへまうさ行さ海のをうさりさるを月はえ不見さ
○天王さへまうさ竜井の水をうさ　○六波羅太政入乃持経
者千人ふさ陣のふ和四さ万燈会しさり夜寄
まさに灯の消さると云さ　○おさふへとまうさ
自物へたさうさ　○さり海の書写へまうさて野中の清水をとて
○四国のうさへさうさるさ同物の都へうさりさうさ
○いつうふへいうさうさまうさ　○旅の千さみさるふ
△旅宿寒　△ふ寒　○旅の千さみさるふ
△海月　さ　四首　△月お秋　△月お祝　△月おさ
あうさとされさ　さ　いつれも月と終さる千　さて　十首

○さくらの花を尋ねて院の法師と尋ねて　△さくらの花　二首

○ちりぬるかたのうつりかはるを　○同じ所の大師のもとに

○雪の降りたるを　△山路雪　△庵雪　△谷雪　△海月　△同摂津　△庵の松　△月の雪　△月の氷　△初恋水　△雪の物　△雪の物　△雪の物

○花をまつ歌の中に　○大師のうまれさせ給ひし

○ひとりとはなくて　△ちりの木　△ちる年の月　○まんぢゅ寺の物道

ところへのかりて　△法師隠居　△老の心　△備前国小島にて

物ふかりける所にて　○ひとのもとへ方

へまゐりてつゆをとひて　○まゐりて物に京

まゐりたりしものをちりぬに　△つゆ入

△ふき　恋の中　○ひとりの女をこひまつ　△ふきえ

△ふき　二首　△ちりぬる　二首

○郭公　四首　△小鯛り　△小鯛り　恋　△ほとゝぎす　○ふるさとの海

て古郭の方へまゐりたりし　○西国のうへ物

物をとりてゆかりの国物をとりさうひをゆるされて

○西国へ物をまゐりてまゐりて物ふかりたの八幡まで

○ちきの一宮へ詣でゝふたりとの浦にて若ゝる月をとりて

○詣でゝ月をとりて　○ほとゝぎすをとりて

をとりて　△三首　○ほとゝぎすをとりて

○天和元年六月一日院建門へまゐりてつゆをふ

住吉の浦に幸ありてとて　二首　○建門へまゐりてふる雨に

たゝ詣でゝの風にのりて　○つゆをとりてもらひ物をとて

○鎌井へまゐりてふやうの王のつゆをとりて　△この雨をとり

○邪魔ふこうらく障ふ入堂一筆代受とりて

○結みへまりなふなてこうの花入月とりて　○新文ちり

伊勢のうへまりけるふみきまりまして白髪入ほくとりて　二首

○ひとりけうちうの男色へまりうるふ　○どうぬまりうちう

てて歌と　○大墨代受んとりて月とりて　〈陰六月　歌の月〉

〈各月　三首〉　○とし花とまりて月とりて　○こうけとりてくふて

月とりて　○ちう代とくうて月とりて

○色いちとりてくうて月とりて　○ふ歌の技にうとりれて

○ちうまりとりて月とりて　○ちう入のちう代月とりて　二首

○うつりとりてくみて月とりて　○平安院のれうれうる

うとにれ代受とりて　○ちくさのうけうて

○ちりのうとりうとりて　○物者うてちみうちり房代と

てなうとりて　○三重の海とりて　〈三業八十〉

○物は梅のうけうとりて秋無の紙に八庄の石とりとなて

○頭うれ　〈近江守からの十〉　○伊勢の月うくまりくふちかうて

○太神宮うまりて　○伊勢のうまりて月とりて

○絵八月の花とのうち宗八歌とると　○三のうてしさま

とう絵とりて　〈三つの　十四首〉　○伊勢のうとの南うて出

いせのうちけるうりひうてとと　○うこうとりて井うひ

あうなとうとりて月とて

○うつけとるたのうてこうちうりてとりて　元元　〈うの十　二首〉

○するかのふくうとうるみて月とて　○ちちのくうとうのねと

[illegible]山の侍のむとりて　二首　○そちのふまりたりけるふ資
[illegible]中将の侍くらとき　○こちれくまれる　白川の軍ふ
まりて　○さしけるれ松の海とて　○志の入奥にはりける松のねをとして
○ちりくの侍とりて　○ト野の国にて栄のけ
[illegible]とりて　○あるりけるて名入れをとりて
○十月十日京河ふまりて　○清奥国にてこの事ふ
○又ふ[illegible]月に嵯峨へ[illegible]　△さくら　△旅宿風
○波引はるふむ芦[illegible]　○波引てそくまり
[illegible]とりくのそれるこそ　[illegible]
○秋遠く波引はるる侍ふ　成道々侍言

○[illegible]　○[illegible]　○[illegible]　○[illegible]　侍言
○[illegible]　○[illegible]　○[illegible]　侍言
らせ[illegible]　○[illegible]　○[illegible]
こ[illegible]千日果てこ[illegible]ふ[illegible]
○侍資門院の中御[illegible]　小金[illegible]入[illegible]
とこ[illegible]　○[illegible]　○[illegible]　○

[illegible]

○大宮の[illegible]十首

△[illegible]　△[illegible]　△[illegible]　△[illegible]　△[illegible]

△[illegible]　△[illegible]　△[illegible]　△[illegible]

○[illegible]

○[illegible]

○[illegible]

賀部

○[illegible]

○祝　△[illegible]　△[illegible]　△[illegible]　△[illegible]　△[illegible]

△[illegible]　△[illegible]　△[illegible]　△[illegible]　△[illegible]

△[illegible]　十三首

山家集類題卷下　目録

哀部

○名とゞめ[illegible]哀　○白門帰哀

○[illegible]哀　○[illegible]會哀　四首　○[illegible]哀　二首

○[illegible]　○[illegible]花枝　○[illegible]

○[illegible]　○[illegible]哀　二首　○恨哀

○[illegible]哀　○高[illegible]哀

○海[illegible]哀　○九月[illegible]哀

○[illegible]哀

○[illegible]哀　○かまの[illegible]

○[illegible]哀　二首

○宇 花 恋 二首　○宇 残花恋　○宇 帰雁恋
○宇 草花恋　○宇 鹿 恋　○宇 荊萱恋
○宇 霧 恋　○宇 紅葉恋　○宇 落葉恋
○宇 氷 恋　○宇 水鳥恋　○月
△忍恋あまたたび　△ふるさとの恋　△夜恋　△別恋　△月前恋
△ふるさと恋　△夜月をと　△入さの月　△夜
△故郷の月　△くもれる月　△ふかき月とつれて　△有明にしも　△雪三十首
△神ぬしのあまたの恋　△ふりぬしの　△月と恨恋　△歌恋　△川あさ
○恋　△恨恋　△恨　△石代の恋　△ふるの恋
△恨　△恨　△恨あまた恋　△ふるの恋　△ふるの恋
△逢てあはぬ恋　△ふるの恋　△井ふ
△あはぬ　△浮　△あひの中心に　△煙　△ふる
△不二に　△あはぬ　△紅　△実　△三ふる
△美に今　△美と交　△夏卅　△紅　△萩恨　△夜
△ふるめふ　△関　△夏世を　△憂のうらみ　△月十首
○恋百十首　△沈こ　△夏世　△夜　△市　△ふる恋
△花　△夕ふ　△梅　△夜　△月あに　△七夕
△恨あまたより　△桜風ふ　△川ふ　△月あに　△明
△花　△花　△浦　△山

△ふるさと　△祈　△夜にあまたたび　△恋　△煙　△ふる
△命にあまたあり　△恋あまたあり　△とさなりて恋　△児めそて恋
△恋ふあまたたび　△蓑　△ふる仕出　△手婚ふ　△小荊
△糸　△蓑　△ふる仕出　△手婚ふ　△小荊
△依恋世とつ　○ふるつき　△ふる人　△ふる
○百首中の中恋十首　△なつふ　△紅　△七
△衣　△さけのゆ　△松　△月
△ふる　△ふる

雑部

○ふるさとにたつ房と戸けるよ人の庵家にまつ
○世とのれるとりゆりうりふる人へ送り
○鄙ぬ　△ふるつら　△ふる世　△ふる世　△ふる世　△ふる世　△ふる世　第八首
△松ふる　△松ふる　△ふる世
○ふるの夕雲　○夕雲ふ　△松　△学の村ふ

△ちり　△はる　△ひの村雨　△てりうそ
△水しら　ちみ首　△こかし　ちこ首

○序風のさうはのきはふとをとをはきあるれいこ首

○鄙しれ　△はは上嶋を　△くまゝ山岳　△郷の井　△いせの浦萩
△荒磯松　△浦松風　△あくちの里　△ちまあり

△ひるのひくしか　△あさつま舟　○行風雲夏　○歌しゝと
△いきあるゝ　ちこ十二首　△松風　△こかし　△萩あし　△焼あし
△風寄　△わしし　△ひくしの夏　△谷蓮　△夕日の山　△岩井のち
△山あ鄙　△吹浦　ち十三首　○八条流の文とゝ名る折白川原をもし
あハせきれなるえ　水はのさうはのさうはと　○内うゝ貝あくせちんと
せうせまゝうふゝてうゝ　△小貝ひろゝ　△紅はの小貝
△次上の箱貝　△色濃まゝと貝　△竹伯雀貝　△子安の貝　△衣浦の紅貝
△ちゝの浜鳥貝　△貝ふとれ祝ち九首　○百首哥中雑十首　△伊のちぐり
△ゝうの浜　△岩ハの表　△山あ岩社　△ちゝくゝの里　△ふち風　△湊のふね
△係月　△芦ちはの舟　△ちうふのそゝ　○庚申のよ
くゝちゝ係　三首　△ちゝ紅はうゝ　△後撰集撰ちれ
△拾遠集ふ吟ふれ　いと物名

○月解とちゝ　○鄙しれ　△ちゝうふ浦　△ちの浦　△ちゝ海
△童のちゝうゝ　△ちゝ手　ちみ首

○年はゆぶりくるゝ人に神ゝ野面ゆて海る湖ゝ

○河行ふ行くゝ人月の江天王寺に詠りたりと守て生ゝくる

○塩竈の島にわちふ行行くゝふまるゝきゝりゝて行へにける

月は浦ゝと毎りくれゝゝ中ゝくる塩芦

○ゆゝうゝゝ行ゝうれ古ゝ海りくゝ人のすゝく

○ちゝ人芦とのうれてわちゝふみゝりけるとちゝ

○行ゝくゝふつけはゝく行りけるゝ女房ゝとゝもきて都ゝ

ちれまゝゝまゝうんゝちゝ五ゝまゝゝ七くるふゝうゝ

○行はゝ人海ゝ御道はゝゝ人はの世ゝ年ゝちゝゝゝりくる塩芦

○中院右大臣出家ちゝ五ゝゝのゝうゝりゝ行塩芦

○為ちりそれくふ堂徒然しくるのち 拾遺
○ひるくさなるつくにわるの奥に行ちりくるとあるてあるさ
とくれくそ行くつうてゆたる 拾遺 六首
○はるの世のしくせにはるかにもなりとそくるくへ 拾遺
○あるそれ女房とのうれて西山に住ひくると見て 拾遺
○河開梨第四のうれくのちにわるみ出て 拾遺
かりめくはてきしける ○新院奇あつちせ地くし
まくしはくくく

○花立寄て述懐　○題しれ　△去の竹ふ　△てをとり
○老人述懐　○郭しれ　△吋ゐて　△ゐるゆて　号三首
○故郷述懐　○大系の良選の序まて　述懐
○関清内侍和さへれの上半付ける古人てて　述懐
○百首寄の中述懐十首　一首△霧て　△山て　△ぬさ　号
○七月十八日舟遊とりてて　△月て　△ぬえて　号二十七首
△寄て　△竹て　○題しれ　△山て　△うえて
△美て　△まさ　△ものふ　○泉れて
うれ　ふて　ふ泉て　向て　ふる　を　ものふて
○友にあひて昔とうる　○題しれ　△花をもふ昔とものて
○寄紅葉懐舊　○十月十日は金剛院て紅葉こける
たとあつ院ゆ　まて　寄つ院の序吋　れ出て　れて　無常入

向て　おせる　修言　○郭しれ　△古人の　△古人の人号　入首
○さうの人月ものれ　○大系の金をうして　る石と
よて　○陸の月ものて　ちられて　れ中　並立ると
○陸奥の石も　因院て　れると　生て　たまて
哀傷部
○樹ものて人の　ものて　るうう月に　梨の　たつ　ると
なつのかきて　れられる　ふ人　ふつ　たて　ふる　ふ
○ひきれ　風て　ひる人と　方て　修言　○院の小　修倒　る
て　て　て　て　伝れ　れ　て　て　て　ものき　る和琴の
ひ　て　て　ると　て　修言
○風て　ひて　ふる

つり入りて人々とくて待てゐ者　○四位なる人倒るゝこと
大事ふ行なれわ　○待賢門院の御墓ふまゐりて
く坂にの女房代行の御墓　○近衛院の御墓ふまゐり
○一院うくれさせおはしまして御所へ御まゐりよ参合
せ　○とあるまゐせなるわ系へまゐるふ　○御系ゐて後
○右大将きんすけのつ代ちふ毎なるうめと　御墓四首
○毎うくなりて山ちふこうりわちなる人と後へ人のうひうり
なれくうりて　○ゆりあるくくなる成るわふうへ
山ふまりて御ふ　○又代くうりなりふなるくけとよ
○おやゆくれるくなりなるむこうせ又行ふ行ふくなれなり
と御て　○六十日の果つるふ二條院の御墓くまゐて

○御墓にの内ゐくひなる九月十三夜人々ゐりて御墓
○新ふ出れて歌なるくと六十日ゐるくといまりなれいあやまれ
なるくゐりて　○ゆりふつりてゆとやいなる人のゐまり
なくゐりまいくんとあるなる返ふ　○くくなりくくくくふ
人のふくをおの千りを出くくくふ　○四行ふ行なるくくふ
○四行ふ行なるくくふ　△最後御墓四首
○行後大殿て入なくくくなりまりくくく御墓四首
○四日のりつる入まくく御墓　○行くくなるふ世とのうれて
大系ふて行なる味のくくなりなるくとくく御墓
○院の二位の局ゐまゐりける時くくとのくくくくくみなるふ
△うくくに　△未のつるものくく　△舟宮のすくのつか　△歌ふ
△ほちふ　△くれくく　△古くくく　△ちくのくく　△七月九数ち

○孫はこゝも果てなるけり流のお物て爲ち　雑哥六首
○兄の入道想空ゝゝなりなる寂蓮より　五首をみる
ゝゝ　五首　○ゝゝゝなりける人の孫子　又
十日はゝゝ一ゝ往生　往書しるに化城喩品と
○ゝゝゝ人の孫子　一ゝ往生　往書しけるゝ寿量品
○秋のゝゝまゝるゝゝ　△ゝゝゝ　○ゝゝゝ
とゝゝのゝゝしる月とゝて　ゝれいゝゝ　往別無常のゝゝと
○暁の無常　○無常の哥あまゝゝゝゝゝ　△孫子
△孫の書　△舟子　○百首千九中　無常　十首　△孫子
△孫子　△ゝゝの系　△孫子　△燈子
△ゝゝゝ　△大納子　△佛性の哥

釋教部

○ゝゝゝゝゝ

○見月思西　○暁念佛　○易は無人
○人命不停速於山水　○菩提心偏の乃至多命而不挑情
○疏文の心自悟心自證心　○観心　○序品　二首
○方便品深著於五欲　○発菩提心
○五百弟子品　○挑燈品　三首　○教持品
○寿量品　二首　○一心欲見佛　○神力品於我滅度後
○普賢品　○仏性　○多宝塔のこと
○和光同塵は結縁のこと　○六道の辛苦みなる品
△地獄　△餓鬼　△畜生　○百首中の中釋教十首
△修羅　△人　△天
△きりきりすの義　三首　△法華経　二首
△千手観音　四首

神祇部

○月の夜かすみふきりて　○鄙しき波　△みちのくの　△里人の大ぬさふるさ　二首
○僧恵天王寺にこもりて異しく住吉ふまうて　辛苦みなる品
○伊勢に斎宮あれはりなるとんて
○斎院はりて左院のまへとをなりふるこれうるこの侍り
なれて五月の居はりなる時　○斎院おくりまいらせ
○ふまりのこりかりふまりて何しかも昔にうつり方
とりなる　二首　○神楽　○百首中の中神祇
十首　△神乗　二首　△加茂　二首　△男山　二首
△熊野　二首　△みなくて　二首

山家集類題卷上

春哥

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

元日

[illegible]

子日

[illegible]

手貫入

[illegible]

若菜

春日野にうちいでてこれかの雪つみてそらに若菜のもりつる

雪中若菜　[illegible]

雨中若菜　[illegible]

[illegible]

わかなつむ今日ふる雨のあはれにもあはれやあのこひしくん

若菜にもせこうたとみてしてい[illegible]

ことうつむの人の家にて花ちる前と遠く隔りたる
先人の家にてこれを
聞校つき七卅ふりて出にくれひとりさびてつるまに
宇義業述情といふこと
なるなりけりのりにおなりてうまとしたつとせしやや
邦ふ人おもきはなるとなるふるこゝろ少くれいなつむものろり
ところ人けるふこのすちたをうるまれたるこのろるう
さらとみるひろ
こういろ月うるかて郷にかりむつけしをくはなうを
鄙ふれ はもをはなるふ
海遠の震といふこと

ものかや浦はかりのうてのうて烟りもしまを震うる
はるこゝろと伊勢のうてこゝろいふうて
はるをうるこゝろれれのうてるれ情ふうる震なりをと
震ふうをうれうたるこゝろ
なきをとのうるをにまうるうをとへうるをふなうをへ
世うあうしとみるれうるれうてをへ震ふうをうてをひと
の人をふ 宅にうるをふれ家あうてうふあうしうもをれうふ
みううをへうとうをうる
世ひうとれうるうをみうもうをうて数をへ分はひにせん
鄙ふ はをまたはうをうをとうてまうる雪消をうをうの山
はをと
うふうてまりをを梅のうたうをひうるふを炎をへ々れい

山里の梅について

うとうとゝんくとてきて山里に行きゝの梅をたづねん

くんせんこの月頃の梅ゆきまさりなるこゝろをめけるこの花にたゞひて梅ゝとうんくすまむ

旅のこゝろを梅

ひとりゆくまゝに花のまつりこゝ頃ゝの梅の匂ひこゝろ

古よ物の梅

何ゝとわかつゝさ梅花に行ゝんくこゝろをさうふけばゝるふるとてゝ坊の梅ゝ行ゝるより梅の風ふちりゝるゝと　めゝふふ風ゝとてゝこゝにたゞれき梅風匂ひと菴のゝゝたりゝる梅とゝくゝしまる

梅ゝとゝゝてこゝろふゆゝもあて入こんくふ夜ゝよまに風いせのゝゝゝくゝゝゝたゞ行ゝくるに春の梅ゝうつくゝゝゝ梅ひけるゝと　宋風春ゝゝゝ梅の匂ひきてゝ行きかゝるゝ行ゝふ

雨中鶯

雨中鶯ゝゝゝゝと

ゝゝゝゝの声ゝゝゝゝ

うくひすのゝゝゝゝと鳴かさる竹の音や深なるゝん

ゝゝゝゝ

鶯にうせてゆくえしれずとのべくくるふ

うぐひすの谷をいでゝ雲ゐ遠くなくこゑ

梅の花の匂ひくること

梅の花にこゝろとゞめて見ればうぐひすの音なくなりきこえぬさと

つゝみ隠れ梅の花にこゝろをとめてうぐひすの音ばかりやうもれん

郭公

ほとゝぎすこゑ聞こゆるはかたらふこゝろぬしの谷の音

ほとゝぎす初音なつかしけれとなれる梅の古枝と

音ばかりの谷のとなりとなれもまたる梅なるぬさくり

音の声にさそはれとうぐひすは鳴きもてゆくかりくるとも

ほとゝぎすうぐひすの行ばかりくる谷とまれとなれて

見ぬ出て古巣をうつる音ばかりの旅のねぐらや行ゆくらむ

涼山不知春とのこゝろを

雪ふかくとまれる谷の音ばかり梅のまゝふまれぬくらん

山里の柳　ふるゆきの音ばかりにそなるふるのと柳

柳風ふくる　人後せぬさかりのかつゝふくりけて風ふくるゝ柳の糸

雨中柳　中くふる風の音をふくて乱れくるるふるまてるゝ柳のて

水邊柳　水辺にうゑそりの名ばかりて風ふくるゝ柳かれ

さつれ　なとゝりに焼枝のつゝいて初今すてかるゝやなる

夜ゝ月れくりれるとゝて

ゆくすゑはかりともこゝろ見られる月の月

ふるさとの月をゝいてくゝみてくゝもんくるふ

まるの月ゝれもるゝれてふくれのとゝう

きてれと　うと出るとゆるゆるとゆきたけふのくれの暮
はるかなる山ぬの竹まちとりて京の桔梗ふきてゆく
ゆきてこそ山ぬしとりてゆきてたらぬ
まちまいつちちはしりふんきはもむと焼てゆふ
ふつさのけうたうもこゆるふとれとくれつゆ夕
帰雁
霞中帰雁といふこと
何とゆかつなたい天の京霞にきてゆるかりね
ゆるかりやゆるかりやゆんこれは山霞へそ
山家うつしこと
ふちこふ花とふこうしたりのこそすんと京
歌しれ　ませにて花ふむれとてふのすきはるふ
春れのあうつりくるふ花まこうした桜のえることれのゆるし
くるとこそ　月これの風ふ桜はえるるそて花うとつるくちうそれ
花と待ん　今さこにまとこそ花もあし安く待ちくるさん
ふかつるふこれのこの時ふりうまうる花の咲ぐもんん
待花忘れしこと
まつふりちはんとふそうる咲ぐ花のれしうん
歌こと　まにゆる桜のえるふ何とうく花ゆれもゆきふ
ゆしはるゆうりうまりれふむもてゆる風こそれい
ちこにふ庭にくるこふ路ふ花とうふるこのけれ
ゆもゆれ花とこそはんそるこいつまのふもあるこそこ
ゆかくるふこれ終ふ花なれしもそれ出ふ花なれしもそれ去れす

梅山の花とうめさいてゝ公

作らまさ花と見てうめの山茅ゝる里つ土九

老木の梅つゆ〳〵ふ咲ゝるとよとて

わきそこむ老木の花も春〳〵今つゝれうちにあ人よ

老見花といつゝと

老つとふ行とうせきゝ世ちれたゝつゝ花ゆ春り世九

春の花とゝいつゝとせう院のさい流して人〳〵ゝけるふ

とのつ〳〵花ゝたゝ世ちゝ行みつけて日とゝ医

せう院の花世なりゝるこゝろわしゝうれ送りゝる

とのつ〳〵る人〳〵ゝ日ゝたゝるゆ春りきゝゝ

返し

なるむゝ歌に人ゝ春り世ゆ世ゝうゝ

とあ門院女房けゝ行るの花ゝ人ゝ

いゆ〳〵れふゝりうの日秋ゆ月のゝ人〳〵たの中年ゆ世ゝ

世行〳〵ん人ゝ花ゝ世ゝ人ゝ月ゝ春ゝ世ゝ

ゝ人ゝ人ゝ花ゝ春と世ゝ世ゝ世ゝ

返し

ゝ人ゝ人と世ゝ春ゝ作ゝ人ゝ世ゝ春ゝ

白ゝの花ゝ春面白ゝ人ゝ人ゝ花ゝ人ゝ

ゝ人ゝ人ゝ春の花ゝ人ゝ春ゝ世ゝ清ゝ雪ゝ人ゝ

春の花ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ

ゝ人ゝ人ゝ春の花ゝ人ゝ春ゝ人ゝ

山ゝ九花ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ

ゝ人ゝ山ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ

わうにんじ　ちうん老に　なる月の頃　しさり　ゆく
ちるとて　ゆくえや　桜　花むらに　なるん
うたえて　ちとせ　ふるさと　人の　花ふる　さと　まうて
きりと　ゆく　てふける
手　とて　ゆく　情　とゆく　ちとせ　人に　あられ　なりぬる
花の　下　ちる　月　とて　ちる　ちる　人　ふる

やどにまう　花の　下　ふる　ちる　これ　春に　月　ふる　ゆく　なり
ちるとて　ゆく　ふる　ちる　ちる　ちる　ちる　ちる　ちる　ちる　ちる
花の　えや　ちる　ほう　ん　ちる　ちる　ちる　ちる　ちる　ちる　ちる
春　風　の　ちる　ちる　ちる　ちる　ちる　ちる　ちる　ちる　ちる　ちる
ちる　ちる　人　の　ちる　ちる　ちる　ちる　ちる　ちる　ちる　ちる
本　風　ゆ　ふる　人　ちる　ちる　ちる　ちる　ちる　ちる　ちる　ちる
春　ゆ　ちる　ちる　ふる　ちる　ふる　ふる　ふる　ふる　ふる　ふる
花　の　ちる　ふる　ふる　ふる　ふる　ふる　ふる　ふる　ふる　ふる

うた　春　ゆく

ちる　ふる　ゆく　ちる　ちる　ちる　ちる　ちる　ちる　ちる　ちる

因幡ゝんと云ける花ゝ人ゝのもとうてきられて
花ゝんふゝむれつゝんのるのゝもとにて桜ゝとうふゝ出る
花もちりゝんゝまこゝにらんせりゝゝ人ゝ山ゝ分ひふてのゝらゝめゝし
花のうゝとゝあまゝゝゝ

佛ゝけ梅の花とまれとうのちの世人ごとに
行くゝやそこにありとうたれとしるたふ梅にまとひ
ふ梅うゝとその衣あつくきてはそふふ風つまうし
ゆやうゝうゝはれやのたゝうゝめ七日のうれとうゝ
のうゝうゝくときくにうつゝたゝにうゝをなまにう
うゝにはれ嶽のつゝきふゝたはふゝさうゝもなくやちうん
なゝひちりて風さゝもふ梅あるふをとはつのてちは
ゝゝのやゝ烟ゝゝたはゝのふゝたとゝうゝ寒くゝうゝ
今ゝりのたゝん人のうゝとうん世とのれつふゝたをまんと
うゝん人の涙ふはゝ風ゝたゝしゝ世ゝゝれつ
ゝれふやうゝふゝ梅ふ風ゝたゝうゝ身とゝたちうゝふゝやはうん

人ゝゝまんゝもちうゝふゝたゝとゝうゝふゝ梅ゝうゝ
みゝうゝく八月の梅ゝの八月の梅ゝたゝうゝ梅のゝゝてまたうゝ世
ゝたのうゝゝ十六者ゝゝみゝくゝふ
ゝゝれふゝんたゝうゝとつけうゝかにゝたゝたくかゝうゝ白中し
ふゝゝゝゝたゝゝゝもゝゝうゝゝゝゝ

風ふくとおもふ花ちらつけよちて梅のこと
ぬ風のなかに梅ふまるるうぐいすの年ふ梅と
なるふくいろいろる花の色とも人にうつはらるらん
ちるこ雪ふるこ花ふ梅やたなるうぐいすらん
春ふちるこたに谷ふるまたにて咲こ人ふ一まれ風
山ちるに乱ふこたの花ふるとこるれる梅とるれい
花まちと人ふ梅ふ梅ふるふ山ふくやうんとこんん

百首奇中花十首

うぐいすの山花乃花ふまめたにとうぐいすとうぐいん
うぐいすの山梅ふ梅ふとめいのうぐいんの梅ふ花のうぐいを
人にうぐいすの山ふ梅ふ梅ふ梅

いうてうれひのかの京のゝ風とてうたてたとうゝむ
年とて物も牛ひとふさくゝとをつくんくあり
くのゝ山谷へうたひのくゝ白やゝ嵐の梅入ゝ花ゝゝん
山角入ゝ木ゝ風ゝくゝうゝむたの雪へいゝかふくゝも氷ゝ
ゝ風のゝ花入ゝてきゝゝれゝ物やゝれゝかゝれゝ花
ちまゝゝ嵐のやとゝゝゝてゝゝたとゝゝゝゝ嵐ゝうゝせへ
くゝのゝゝたゝきゝゝて物ゝゝ風ゝゝとゝゝにゝゝん
牛ゝれゝゝゝくゝゝゝ牛ゝゝゝあとゝゝゝゝゝくゝのゝたゝゝゝゝ
うゝたゝゝうゝゝゝとゝゝ風のゝゝゝゝゝたゝゝ牛ゝくゝゝゝ
ゝゝゝゝにゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

かゝむゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
牛ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
物ゝゝ風のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
木ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

[illegible]に今よりいかなるとみまて風とそたん
[illegible]山桜ふきまく百年の春をえんにはいはとも[illegible]
花とみるかなとうけはとをして風のそ[illegible]
風さそ[illegible]花のひ[illegible]
花さうり情とにはて風うてのうふちはをはうはや

雨中落花

情うつ雨にしられてちる花のゆきんは行にまくん
風のおそ代落花をいてはくはな

山路落花

山桜はきる風のうはうはに花とちるはるにる
ちりぬる花の秘密をうはれはをるまはき変代山城

夏中落花

ちる風の花とはいてはくはと[illegible]府院ていくはくはふ

都はは花とはりてはいはくはと
ちるをさくはれはんのをるはは花はは[illegible]
桜はなははれてたてりなる柳にははたりのをなるとはんて
吹はる風ふなれはひくとはんは花を落るち柳はは
花はりたりなるふはれて吹くはふなるはくはとはは
ちるとはれはは花の白はもとはれは花はは白なり

苗代

苗代の水とはいたなはうはちひのはにくはは

郭はは沢

はるはるはは沢のはは水はは風のたはは
毎はるはは沢水のはるはをはは門四はは[illegible]はは
は春はは山田は水をはは堅はは時はは[illegible]はは蛙はは
なははは[illegible]はは沼沢はは[illegible]はは蛙はは

蛙

歌之次

草

題しらず

山路の雪

はしら山のひろうをとこ

うたつとる

疑冬

[illegible]

[illegible]

[illegible]

夏 寄

題しらず 浪ちかれい衣ぬきうすくなる月花とそてさはりなし

夏はなをさしてなりけり

草庵をうりあけてふたりの人とともにこころ

夜郎花 まとへきはなたくはなれ郎花やるさ所をとのとそこる

水遠郎花 たつるはきはなたとかんはせはの井をたの侍まつ郎花

山の侍まつくる郎花とちくりてやくはせ井しん

秋郎花 秋姫のちりにはいとも侍れやゆかりのりとこゆる郎花

まのうちふ郎をとまくとしてくと

時はとをたてわらわ郎をまきてくこのろひをれ

時雨 郎をしふ花をちとうをとをとをやをれはかりをれ

あはしの中をたうをたしはをてをれはりをまりをとを

はをやはりんのをつををををとはをはむをををりを

あはをしふ郎をと待をしはををををををををををを

郎ををまはをの郎郎はををををはむををれのを

郎をとまををはををををををををををををををを

はををををはをををををををををををををををを

郎ををををををををををををををををををををを

はををををををををををををををををををををを

人ふををを まをををををををををををををををを

をををををををををををををををををををををを

はををををををををををををををををををををを

不易開子規とをををををををををををををををを

郭公卯月のつゆふかくなるとこそいひてはさらるる

雨中時雨　五月雨は時もそらぬ雨降りにふるとくく

ゆきかけてこそいつてしと

ゆきうるたてうれしたの郭公さうはうやさてうみの聞

心音のけうとしいつてしとくくちんくくふ

郭公きたてそもとりひとあれの山に住をり

けうとと　ほとゝきすはつこうはこのちをはなをさきをれ

けうとはわるこしてとうとふうくんにてくん

わるくきすうはうはうるをりてくうつくりて人のやくん

ひくこしそこのうわけはるふうるるもとんのろ

けるとちくるふかりてもみとうけたのくよひさるる

けうとのくるみ前こそくくく

わくくきくるみ前なまよきーたとあるに山ばかりにて

けくくんはあまそうとこのふやすくされかやくきれぶ

やとくるんとくくてけるくくの山のれくんぶ

大年はをくくれ山のほくくきれあせをはまを降る

けるとのちくんに山ばかりにてあるかうくくえん

百首　十之中　郭公十首

なくんなやはかくたのあるかるくはうくと

とくれてくたにはやくきれるくくまるとうくん

きくくけんにはれけるやてはくんはれくくまのるる

わくくやくたくくくくくくとうくんてとけんとて

[illegible]

[illegible]

[illegible]

鄙らん

文月雨

文月なれの宮にぬりのくやとりとりわるるもの所水
やはりて法はうとさとりたれいあるもとるあ奇ぬ
水ゝ多入のまゝ月なれ
文月に水まゝろしゝ
こゝしく古里とのろ
ほゝしゝあれやとうろ
ろ
ものとうやあれて水にぬきくるにされのれ
文月なに小田のよ前やへうゝんにせのうにちてひこれ
文月なはゝろゝれいあゝ雨ゝ人ゝ生ゝ世ゝ水ゝいゝり
ゝ
ゝ
ゝ
文月にかれのまゝ
ゝ十文前ゝ
ゝ
ゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

旅の草枕とゝまりて

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

蓮池

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

水邊納涼

[illegible]

[illegible]

[illegible]

題不知

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

心家侍れといふこと

行くいかゐのまくはしをとはうすれとなほ

歌ならぬ　ちはやぶる住吉の松をくらせれはくもなきつゆ

つたふるかのとはまとれいこの水とをさりくり

六月祓　さらはらへせやてれはく風て涼しよ

秋部

ふきこのけしきはれはいてて侍つく風一れはる涼しいかなと

さまくしの表とこらて侍つく風一れはる涼しいかなと

心をはしるの姿くらいこと

れはるとくのなてそれをりこ風をの風のなきふ

初れの風なるとをーれはくれ風のまをとやを

はるのちれるとのまつ風ふきそ光ひとちてれ

歌ーる　もるふるこれはてはまたとはうるれのこつ風

七夕　いそれはまそ雅小まの秀まんやそれ歌に人やそとと

書ふりくれはつのて七夕の時きふるや秀ふりうん

天にくこの七日いもたのたーみもひくふをよこつ下

[illegible]
[illegible]
[illegible]

九月廿六の八月花つくり書もて神とほてくるふ

野径秋風　まくはぎのもとにてもあるくらはぎ花下露

女郎花　とゝ見くふる神とやはなつ露もあるとゝ見れ

そゝ見くの人に成てこゝ花よりはあるこゝろ

水速女郎花　こゝ

沈の面とけとるやうふうつりて水かゝるとゝ見

たゝひきこゝ花のとゝとゝ女郎むしのとゝ人ふうつてこゝ

女郎花水こゝちうつりて

とゝ見くゝ沈のさはくはひらて見こゝ神のちるこゝ

女郎花常こゝ

こゝ花のはに露のこゝ

おもしろき神こゝ

草花露　くゝ花露こゝ露はこゝ露はこゝ

人方の世人の家

草花はと浮こゝ

つこゝさはられて

霧中草花　かに出ること

行路草花　草花道とこゝ

草花道とこゝ

久露とこゝ

思ふ入る面ふ

とゆこゝ

庶の○やんごとなきねんぶつの人どもうるさきまで
庶民たちのくらしきはきりつい汚きうらうらとして
草花とりどりにけり
さかりは過ぎの下草まばらに枯れて拓くやれとそこそこめん
郭公は月代なきひすがるとぞ聞ふそうみもて沈の浮世
うつりは色とかはりてなまなましくなつかしむ
秋の哀ふかしとりどりさまにつくづくと
花とときくあてはかのそこたけおくれ
古籠の菊賞　色あれて秋ふかくとかるうやとをはきのとかはめるあと
くさ〳〵秋の千　十前ふかくこのあたりこのあたりの秋の
もにあく秋いこあれもこのあたりこのあたりの秋の
りふかてこのあたりの秋のあたりこのあたりの秋の
花とこそこの人の中にふきつれてそこのあたりこの
萩のくとやこそこの人の中にふきつれてそこのあたりこの
鳴やこのこのあたりこのあたりこの秋のあたりこの
うてもの情のこのあたりこのあたりこの秋のあたりこの
庶の○とうきこの○にこのあたりこの秋のあたりこの
秋ふかする月のこのあたりこの秋のあたりこの
うつろふる夜の月のこのあたりこの秋のあたりこの
行くうくうとくいこのあたりこの秋のあたりこの
秋のうとくくくる中て
やとくる風も夜とこのあたりこの秋のあたりこの

[illegible]

何[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

四家秋夕

[illegible]

[illegible]

[illegible]

きりぎりすとなきさにうるとなくなかにはなほうきうらいらくも
虫の○とりわけてやうやうふんぐれはりあとてうる
はたうぐいうるはたの虫のなたうなかとてもなのみやたうる
虫のねてくさのこめつきはたらやうやうあはりてしし
物もとはねるもとうぬ蕎くんりもくふかけうるうん
ひうり○はなうてなうて蕎なくく○ときりいあるこれうて
深夜聞蕎　なかしやもとりはもつてんなもやもめきりくれ
故郷虫　草むらにかくてうくんもあれやうりはの花むりの多
雨中虫　くにはるる小竹小屋う蕎ふくくあはあてうし
四家小虫をきく
小夜吹ふ田のうはは虫の○に蕎ふくんや池めうさんん

夕のうはは虫のこと
みくさうくんうはうはうは

[illegible]

初雁　初雁のとき

[illegible]

船中初雁　[illegible]

夜雁入さしとき

[illegible]

霧遠と　[illegible]

霧中雁　[illegible]

霧上雁　[illegible]

[illegible]

鹿の鹿　[illegible]

夕[illegible]

田菴の鹿　[illegible]

遠居小鹿とき

[illegible]

人とゐる小野にまうりくる小鹿の[illegible]

鹿のねとぞ[illegible]

小倉の[illegible]

[illegible]

鹿

霧

所行客とるるこころ

名残をしみつゝ夕月夜の空

山家霧　たゝこもる雲井の月の

ゆくへもはるかに見へぬ

ものゆへ

霧

霧しらぬ山の中にも

年ふるまゝに

へてそこゝろ

ちへ

とたのもしく

秋ちかしとは

秋の

入りかけるまに

今月とはつゝ

出なんとする雲にくもる月のとりそへてまつやこしのの山

雲間なる月をわるといふこと

秋の月ふかき山のこしの雲のはるまもなれやせむ

同月をわるといふこと

月をてらしつくすけふにくもり時きれぬふかきと

八月十六夜

山のくまなき雲のうすきにこそ月をもてるきはのたのもしけれ

うすくれなゐにおもしろき月のかげよりて秋の半とをにしるかな

天門名ふなるれるひかりの今宵月にしかしかりけり

さやうるひかりてきこしめしの月とふまれるえにしかな

ちつけふこんけのこしまの月なれくなる命うる

れいてきまれ月なれくなる命うる

[illegible]

くもりわるすくれと

月をこれいうひけるくもにつまれて今宵ちくれの雲ふかきほど

後夜月とる　後きろん月れ雲ふ後ほとと雲ふくれ明ふるか

雲月とはるとこと

ちかの山月をむきるひとうたふ雲のはるかなりけり

名所の月をいふこと

ひかんうさはの雲ふ後とうくすれのこれ月

なくてうさこれ名ふ情ん明れいふて月のさはき

月はとくるとこと

やはるうらはうらはるれくる月はけてきえとぬ名る陸れくて

月沈の水てり紅葉ちりしかてとと

水ちくて水てしるうまさの沈あてくもるれ月の月

沈上の月といふことば

さえわたる沈の面はきよくれに宿れる月もやうやくも

回くと通路ちうてくくとしたるふ

宿もつ月はえの堀やさちくふうふつもひろはの沈

沈てさむ月にうれるほやい神ひのこせるこさえ今り

海辺月　はんくる月さむしたのはくもいう風うれの烟と今と

海辺明月　秋はるる月はえてうしてさて波のあつく氷とてしく

月ふうまた　月めとえたふうさ〇てあ月むうなのりふ高とうける

宮風の義ふきわれとと有物月のうけふうく

月荒野花　花のうとうのふうせいれのれ月をゆうりのかうりる

月荒野花とふことと

月ふくれとやく冷しはのうさりなりも

月荒萩　月すとて秋ふくさむやうとふ長くうきれ林やあ山

月菊安郎花　庭さある月とくりるとと長くうきれ花とうれい

月菊薄　野むしの月にうれて色のうくねとまれくえたきぶ

花すきき月はえにはう宇ふくとのうたにそめい

月菊紫　木はるりるふの月はうのきふねをとうて泳つるい

月菊鹿　くくれうきくちうてはれ林のれ月ひむ秋の祥鹿のと

月菊女　月はしむあうちふすくく菊鹿のとくうや林とうん

高うくくふうさて野むし月紅ふふ秋の花はれくと

田家月　夕暮のみちくさ小田の稲葉うへをかすめて月の初秋

野ゝとゝ　ゝとゝて月をかなたもこなたも通ひくり傳へつゝ

松の木陰をもりゆくふ月ゆゑひろひてとゝて月とうてゝき

ゝ通とりとゝゝと

ゆゝてゝろくゝすもゝゝ流のおうゝてくく水にやゝろ月新

旅宿の月とゝとゝゝゝと

月ゆゝもゝゝゝふやゝくゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝふ

旅宿の月とゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

月寺のけしきふかくこころすみ

昼ごろ月にわくるとてまもりやはつく清のまるうりせい

月ふるさと去と共に

いつくとなく行つのてう月のちんりとうくるをうてまちえ

月にかせて月とのくらふ

世中のうたもさてもむかしのかぶれかちてそれ

よの中いくりてもむかしのかぶれやちりてもこ新を始へ

世てもむかしのかぶれやちりてもこ新を始へ

月やふるれたとてあつくとさてこれのとれ月

れていつてうれふ月のとまてわれるさてこのさまに月迷

なるちにふるものとてもむかるる作ろ月のくるとやまん

月とてこうれのよのかはてうけてふ紅ふかたてうん

こむしてるかる月とてこうるくへ金とやむ人なるこ迷

けてこて孫うれわる月うれ迷んやこも思さらろや

れのうれ月にこてこんのこてうのかのるるる月表れ

天気くる月ちのやるやはとらても風のやたくらえん

時りやはくるふとてんふれとうるれへうの自

中しふくうくてもくるしきふくるのこうれれの月

いう中うれうれこれのこれ月むてにやちりせい

てり海さ迷のこけく潜てあるり三月とうろん

月てなるるる海のうれやのなてこちのらく

いさんて出る八月へ月うれそ入るのくうくさうさ

月荷速帳

鄭こ八

月

水の面くやしう月さく入ぬるうらみのとこそおもふやあらん
さとうくんやしりとゝのくに[illegible]うそれのしん月
いくらまて宵ちゆ[illegible]にやうてうてかゝる月ひとちれ
あまちあまそふとゝけ[illegible]のひとゝふ光つゝめるれのしん月
れのしん月とゝもうゝ[illegible]はゝ霞ゝこらゝそれ
ふ

月八奇ちちとゝふ

入ぬとやあとゝ人いせしんれにうるゝ月八ゝの月
待出くまちたゝ宵れ月ゝれいやそくふまのうそる
れ月やあまつゝ井とけゝんやゝに月八ゝやゝる
うゝそ衣なゝれるたれるゝ月ゝひき
逢ゝたれちゝの月ゝれいしゝ侍ゝん今ゝしの

月ゝゝゝゝ月ゝれのゝとゝくゝ
しのゝれのゝ人ゝ月八ゝ表ゝゝゝ月ゝの
くゝふゝゝゝ月八ゝゝゝゝ月八ゝゝゝ
このゝれ月八ゝ月ゝゝゝ月八ゝ
ふせんゝけゝ神ふゝゝせゝ人八ゝ月八ゝゝ
れゝくゝ月のゝゝゝゝ月八ゝゝ
れゝゝゝ月ゝ神ふゝゝ月ゝゝ
月ゝゝゝ月ゝれゝゝゝ
月八ゝゝ神ふゝゝゝ
月ゝゝゝゝ神ゝゝれゝ
ゝゝれ月八ゝゝれゝゝ

ゆきてくれ月にくのとみてくれていうふうこんとてん
月のつてふとなるめつ牛むさしやあのを
ゆくもきもとしらんちてしらあまるる月はれ
山ふれ月とかしのふるまるねちるのうるき
まてくれも秋ちるんれりてはふ今年月とうてれ
月のつち屋てうてのうたてきくりてれとてよ
天はくれはふちれ月れ光の屋ふまくる
あのの月はうちるうしぬとれいれうたちてれ
中しふうしやのうてう月とてえうりくれ
やてくれ岸のうれれてうれや月ふてりのうにたくつ
てうてうてうやなくんれのう月の光とまれまくて
ゆるてくれうれうれうれうれうれうれうれうれうれ
うのてくれふ月のうたんうれれのう
くまうた月はふ秋うりのうけとやうて京くうる
秋月はいうてやくのくうれうれうれうれれれのう月
やてうる月れうれうれうれうれうれうれうれ
てうてうれうれとてうれうれうれうれうれ
中しふくうれてうれ月はりるさのうふ
うれやの月はふれれれれれれれれれれ
こやてれれうれれれれれれれれれれれ
いてれれれれれれれれれれれれれれれ
やてくれふ月のうれてえうてれれれれれ

くまもなき月かげのうつりと添はしまつ焼松のふしを立つよ
月さゆるうつせみに風吹く氷のうすきたもとしぐるる
天風ふきはらひて出る月の光をしるるれのこれ月
ひかりをくもりなきかげ月ふるもうつりかつをを
みなもとむ天の川きしのうつりて月とからやさくさの林
光といくりの月をさかるうるたるたるこの宮
うらの秋風のふかるる谷はたらふやうる月乳
うらのうの前田風のうちの出てかのうてにたるの宮
ふるくき史年の水たわるるもくまやうれる月やさうん
物りたむ方ふ月はさうこれいならるのなたるは
たつのきそしくうたに宮さのあ月のうのはへ

百首年の中月十首

いそのまの月に光のうるのうるのうるのうるる
波のうふ夜きくくたむ月のうけいまふ氷とうたるれば
月とうそたうに代うるとうるやこいうるうん
くうれるる吉うの浦のうとうるうて波の月代うるる

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

九月十三夜　こよひはいとあかうかがやくに月のまへ[illegible]

[illegible]

九月つごもりとてあるべきことを

月のなくてくれぬるあしたはいとあはれなり

猶閑居抄云　[illegible]

[illegible]

隨筆抄云

[illegible]

月最美

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

はくるゝ月をみわるあとはつかうしもむ今日はつかる

行春はをしむ

ちりのこる花はまつ人うるはしの春の名ひとつ

鶯しん　鶯をはつこのくこゆるうしひとまとて春はいひふるゝ

春のまゝ　宗祇　春過る郭ふまらてくれの春はてしらせて

おもひとのくゝるゝ

なれもまた　松もうゝ成果て世をほろ春の言ふ

もゝ世ゝうて春ふるもとゝうてゝとくてゝとゝふ

ゝもゝゝ世ゝけゝゝ　風ほろふるもと

時雨はは　宗祇　冬ふ

ゝ家時雨　宿ゝゝゝゝの栄はゝとゝゝ　作ゝゝゝゝ林産はは

冬中時雨ゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝ

月前落葉

山風の月に木ぬれをはらひ散葉の光にまがふ紅葉かな

瀧上落葉

木枯ふき散れば紅葉やまくれんもみぢに色ある瀧の白玉

水上落葉

白川の瀧の水上に紅葉ちりぬれば山川のそこ

落葉をしがらみとせり

紅葉ちる山のこずえをあてびとのとがめぬ人やなりぬ

草花野路落葉

紅葉ちる野路のしるべとたどりつゝ秋きぬ人のあとをしのぶ

山家落葉

ちりつゝ有て木末まばらなる紅葉ぬれ

木末にのこれる月にくるゝまもなくてもむとも

鹿しらん

秋ぬれ木末の落葉ふるゝ人のこゝろ

そはぬ人のこゝろ

紅葉はいの入れば散ぬ

ふるゝ人のこゝろ

氷連寒竹

氷ふるあひて色にいでぬ女郎花

竹門の草とゝもる

ふるゝ神ふる家とゝもるとおもひ竹門の草

おろく竹の門ゝ閉つゝ人のゝ

おろくてゝ

山家竹草

こゝろと竟雅僧都の坊こゝ

うたゝねゝの竹門の草

門の庭の竹門草

氷留山水

岩もゝ木末ゝ

氷

湖上氷

氷ふるや氷とむすびてんくるこもの湖水白系

氷紙とゝつゝいつゝゝと

氷わる篠のゝかけあるれいまるゝ湖水の山城

ゝかのうれてくゝ湖水にゆりくふうけひの氷てゝるまて

こゝりくゝふゝたにくるまていくゝゆるくりゝゝくゝとゝ

ゝゝる

ゝりゝゝやゝゝるゝけのゝるゝたにゝひゝてゝゝものゝゝくゝ

千島

あゝゝゝ

深山霰　松の葉にたまりやの下ずゑふるあられ
樹木にちられつゝとぶと人
たゝかせてねとつゝる雲うつかるむかちる花
鄙ら　まもなくて雪まだらに雲ゝ花有の方に成られ
たられそめつゝ雪ゝ降る花なれば雪の
そ降ゝ降る中ふ
山さくら初雪ふれば咲に成りしのいさに成ゝ
鄙ら　山桜花ふれまつて咲ゝ雪まちも名
夜初雪　月出る物もたゝ雲ふれば白雪
庭雪降　木葉ふる月のつゝ雪降ゝ
拾ふふ雪ふりつゝと

雪道を埋む　降雪に雪ふり雪いまゝにおれのゝ山ぢまれ
雪埋行ゝ　雪埋むその吳行ゝ
にわの門雪ふりて山あり困石見雪ゝ
けるふ　降つる雪とふてまゝそ日と送るゝ
山居雪ゝ　年内ゝ人
雪折待人ゝ　紙やふ雪ゝ
雪折今支ゝ

[illegible]

雪の朝雪

[illegible]

社頭雪

[illegible]

[illegible]

雪

[illegible]

[illegible]

[illegible]

袁立りて作りふこんふさこの雪深はしを見れば
凍りまさふ雪つてをいふやつ祝をとりて
ゆつ代法のそのむとかてつふ雪とつこりてれうりを
年りとる情は雪のそたちふふさとこうふをてきれは
大原いせまうと雪代にあけてもふふ人も無さりを
はやして二ひつふにを雪いひれてきのれはくを
雪をのく菴はほとをきをて藤をてこん人どもん
悔くも雪のをふふうて藤につをもうとつをる
庫裏入りたるにまをいるふにうつを
大原いひつはをるつ近れは雪をるかとをひうれ
をへうれてふ祝をんしひれをるつ雪のをきい

祝のはをもかをまをるつまりをしたのををまりをうんのを
へ雪をりてをはちりつうつの
雪はつ埋てくりををとれをはをしふをを
雪をを菴をつるれをんををを西白をりをををををををい
とをもんをんをとをひををこけをををふ庫のふをを通りはるとをて
人をこをて雪をとををはふを祝つをるををををり
名千十首をををををををを

鷹狩

雪中鷹狩

月前炭竈

家業尋

[illegible]

[illegible]

歳暮

[illegible]

[illegible]

離別歌

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

てうてうれもやこゝにあそぶらふ行てうてうと表わすこゝろ

さまざまにいくさせまたにうれしくて別とたゝかふなるうん

きく院初とるこしけりなふ芥院のおつの年文にまつりたとも

なるふ人こ別のうつまつりなふ

さりともと祈ひてしくと れひ ふきてけ ふとこゝ別

回打つかつの梅の花なるとうてうくをむかりえけとすける

ひさいはたに別のけさふたのもいはるひわもれさ

うへーせうとうけまりてうて扇にうたてきつてなる

女房六角局

はるのうひうこゝふさ後さんれはあしをはるこゝ

羇旅歌

須磨にて住なれぬるこゝろをよみ侍ける

あまをとの漕の三まりなれぬる

たゝりて漕しへきはかをたれて陸さいるやへ浦なる

ちかの海にまりなるたくしりなる人九月ばかりふたのなり

なれをはらうなるへたうりて

秋いるはいへりへ侍りさいを表なるへき旅へうとうる

うへー

大えの女房かな

はるをきて五出るかけ房けさいはえくく旅代此ー

ちかの湯出て京へ侍りまうてきーー古へのもあれふなる表なり

なりへうたゆりーへのすへへうりく

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

海辺重旅宿といふこと

はちすき枯れわたる○花てうちうるき冷青のそこ

寒夜旅宿　旅○てる竹の根て有明月の新てきうる

たゝ海ゆりくるふ入れときて

[illegible]

旅まくら　なるかをれてこそ新しき旅てる月を衣こそれ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

天王ちくまりけるふうてゆうとうのひとりはなれて
あのわたくしと同名れてあまのはしときて宿のんとうひけ
んてしやひさまれてしもんなる

いくうれあまのうてとまてふむりれはの神てうれる
天王ちふまりくるふる八ふりれはにとりて宿とりけ
るふうてりくれて

世中とうてまてるのうてうりれ宿りと情むまふ
くしし

家とはるとうきけりうれ者ふうむうてうりて

天王ちくまりくるふ行てしの行りくとはれ光て
りて　夜ちも海なる行の情りそやれ様はるまれの月
天王ちくまりて毒井のうてとりとてよる

陸ちの空の行てくまれちる毒井の水て新うてつて
六波羅太政入道持経者千人ちくまりて
くやうけるやうてのつてふ方晩今しけを和まるまに
行の清くるとそのしてつたくるかくく

清ふへよけの光つとりひとうくるわまこたたくり
いうてふへとまりて口れへふくるに

行うて新うてしやいこ申しくてて泳られる
くり後書又へまつうてゆ中の行うとりくること一ひうふ

かりふかるまへてはなりとてそとりかるふなたこーさ
まーうーうーうーうれく
青々ーゆーゆーはなはなはな

くもりがちなる八月の空にて行く月の影もうすくなりゆくに
あらけなき雲たちのはしるとみるまに月うすくなりぬ
詠まして月いとうすくなりぬこのくれこのゆかりなりけり
いつの秋けさの空とおもてんとて月とともにてし
さめきぬるまでもてあそびてしかりしかりて
浮雲あらくれもうすくなりゆくに
はるかの山のはにてこの舟やうてをしく船にてるふ
ナカの山のなかにきりくしとのるまたいやはしたり
さるこのてはてはこの浮雲のわりなるふまつりて
しかまん昔ねむの春てよのらんはいたらんはせん
なうこの国にて人の春のなくしかりなるたちてなるむと
ひてはなるふ月つくりてはのうくはくはれく
くもりなるたにて月つくりてはの月これはかて水の強まくくる
とみるまにたるてあくれふそくて
今よりいつしか今あれはかりる位なのをとまれ
なるはまたはのつくりくるとりて
久ふへて秋はのうとくよはは体をてへきへ今なねをて
ことと又秋はくてうれはいはひりふなるをて
雪のつりけるふ
はのしたの雪ふるあのるをれやこるの泉ふこゆるふふ
雪うつてあもふれるむなれはたのはるこぬくり
むくるる猶の雪ふ月さくてくへん市ようきこ泉する

まことにこれはこの人のこゝろをこそ
折しもあれ雪ふりこめたりけるに
やうやうふかの雪をはらひのけて人の
谷のあなにかくれ給へるをたづねいで
くるまにのせてやどにかへりもゆきあひたれば
ときどきこゝにのぼりて
大師のもとまゐりてをがみたてまつりて
つねにまゐりてとりあつかひたてまつる
えんぎ寺の門にたてるあれのうしの
ぞうの水をうりきんずるをやとりて
又ある人に　コレ後人ノカンガヘ凡例ニ云カコトシ

ゆんでこれ行道にこゝろのかぎりこの人をまつりてと
してたるやうなり大師の御ぜうきをうつませおはし
まして山の岩ぶりにこのそこに一丈ばかりのこんつきて
たてられたりとれば日こゝにふたりかやをせをきて行道しおは
しましけるとのぼりもとりあつかひ行道をへきやにたんも二
重につきまはされたりのわるれのたやうとふるまひ
うまくこもりまゐりつゝて
やうやうこの堂をたがやきこの岩ぶりを
やうやうこれらの大師の御ぜうちをせをせをゆ
る岩ぶりわたしこゝろのこゝろをいかにこの道の人は
わたしこゝろをうつしたるこゝろとかとてゝやはこれ人をの

ふてもなをけうりとくてこれをふかさまろ
し山の麓のさたのとうりとるやうるとローうつたる
なうりの道をつりうまへてうたつさのりさ家ふ
まつりこれの師にあうせおうまいるかれをたに
とうそをそーゆうりをたうの石をこうりなくお
わようりうる師の天うこうつりうりるたうれちく
月百姓いふうくうつこうれもれみかきふてたうふよ
うゆふてへふとーれにつよさ
ふれるようたの石でもうる百姓下うる天命きと
善通うの天師の師れうをふたちのて天師の法
師うきくせられうきく天師れるもみくまいた

四つ門のうくわれくかるとしてかきとうる
てへうりんてんにかくみかくかーう
備前国てふうるーかふりたりるにちとよ
あとうこれいとのしこれてうるうたさかにうるとう
けてたくつたなりるのさかるとのこのさわるとれ
けたるうふうたうたちまへのなりうるくと
ーなるてれきわーうるうさこれるーくうり
なくえうこうけるく
たてゆるたくうる浦うあかたの中うすれるお
りーふうるーー方へまりて四国のうへ人なんくーくふ
うをちくてかへりうふうのくうこうとーちくおうたの

[illegible]

[illegible]

[illegible]

西の国のうえ[illegible]
[illegible]
[illegible]

山路の[illegible]

西国へ[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

竹のまとふらけてわるいるかたりあるみたりあるみて
清つきて月いてゝ[illegible]

[illegible]

つ[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

本所すみだがわ[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

郭公　近江なる逢坂山をこえてとよみ侍る

世とのゝれてこゝせのうへくまなくてゆ

すかしかくれとなくこゑにうすなりもかなるん

伊勢ふまうちなるふ太秋えにまつりてゝなる

秋をよくんとうのんゆきてゝ月秋にたゝ

俊頼　伊勢にまうたるとき月のれおもひいでん

てゝなる　物語に旅なる月の新とゝろおもひ出にるゝめ

いせのいとのへらのゝきまの行ふいとるものりゝらけたりなると

伊勢のたゝしとゝ　物語にて　ゝ月のきゝ月ゝ行ふゝて

逢いをもつもゝらんむゝ月のゝゝ月ゝくゝらゝき

ゝ行ゝゝ　ゝ月ゝゝゝ月ゝ浦の波ゝせ

ゝゝゝのゝゝれ白ゝゝゝゝゝゝゝゝ波ゝおゝゝゝる

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

伊勢のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

やくそみりこうりけもてこひいでられてゐ給ひなりくおもわんけさ月関をいでらふたゆき

白門の関をと月のゆく新しい人のこころもるなりゆきもたふりてこたけてこゝかほりはるめぐのこゝふみはるえて

長く別出し日おもひつけくれて帰ゝ月にたゝしの

あゝしゝるまゝきたくるひとゝふこひしくれてこゝみる

別出てゐ坂新しわまてゐんりゝ之門の関

たけくるのゐい者になりゝりくれゝも絵とふゝてゝんゝて

ゝりゝてゝゐる

拙ゝくるゐゝきゐ花けくまゐきゝてゝゐひゝゝ逢

伝つまゐゝりくるふゝの人ゐゐ

ゝきゐるゐの絵ゐ社ゐてゐゝゝれいゐのゐゐ逢

ゝりゝるたゝうゝとゝゝのゝゝゝゝりるほりゐくてゝゝゝい

ゝゝゝ人ゝゝゝゝゝれいゐゝくゐゝゝゝゝれるゝゝゝけるゝと

ゝゝゝ　ゝゝゝれゝゝれ絵ゐゝきて人ゝ通ゐゐゝ代ゝ

ゝの人ゐ里ゝりゐゝに二ゝゝゝりゝてゐゝ

下野の国ゝて茅代煙とゝゝゝゝゝる

別近きふゐゝ大ゐとゝひゐる茅代烟のゐくれなるゐ

くゝゝりけとゝゝゝりくくふきゝゝのゐゝをけゝけゝとんゝ

くゝゝりけきゝれゐゝのゝゝゝる紅ゐ同ゝ絵ゝ夜にゝゝゝく

十月十二日のゝゝゝゝふゝゝゝりゝくゝゝゝ乱ゝけゝゝく

まゐにゐれゝりゐゝゝゝゝゝ衣門ゐゐゐゝくてゝゝりゝむゝひゝく

かんなりにのきしふつきて衣川の海まつもるてしかはやうゑ
ものとろるうちーけゆ行ゑりてうらさひやれて
こりかきてんもこそてにくを落る衣川をふきてる夕ー山
陸奥国にてのくれふるまる
常よりもかなくそなかめる旅はやみて衣川をめる
又はしの二月に出羽のふるーこてたきのふるーちにはる
桜のあちらも落ちつをこらたむりてなをそりるとちはくて
もかんけうしけまい
たくひるきをひてそのはうる落ちつむのまわひい
なうるえうー

風あるき宋はは落ちもれをそあらうりる

はりしくふもひまりうりるてー
はるふたのうるこんいのかりそやをとはん
はりてをくまりけるまりりんのをはるやうるまはれ
うちるの衆ーとまるをふこてやうをまんにはーれうん
あきをくはりしはるかくにはくるまりはは大物を成道
のまりんはうりる
あーしはは木をたるひてうちうるーんるーん
うくー　はるーてるるまをはは風みをれやらせる
ちんやををーりるくーうるのをりをるるーて
ゆうりまつきをーのふはるりりはりはりはをれーも佐吉
とのんじはるまををーうるあるをを入はーーりるふ

[illegible]

くゝ　みやこて

ふるさとをこひるこゝろをたにそふて
[illegible]

[illegible]

いろふかくもたりなれいろ

雪ふるはさこそ[illegible]

うへ　時忠卿

ふるさとの雪はいとゝ[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

うたつける　四院兵衛尉

うたがたと風の風ふきたれ　あとをしめる梅ぞかをる

[illegible]

[illegible]

[illegible]

うへ　叶ふなしとてうちふしたるに
深夜水戸とつてとうかうとうかうと
きれつる音の荒つるとつるる水のまに
うかのみれ院の格のとうて月おろしかれ
ひかりとうのれ西住とうへ京へ出たりとて
ゆうて格の月のれ西住とうへ人の
うへ　西住とうへ
ゆひやうへ月たりてひかりる月の
入道宗盛とうて住ひうふうやうる
ひかりにひかりひかりる冷川の水

ひかりにきれたのくかりるの月のかりをうたとうり
ひかりに宗氏つれくいとうのうちうさ物るくのうちうを
ひかりに毒の遠ひかりにかりてなふうくなくまりらふ
ひかりに岩に生てるる水とんうつて生つるとうひろうに格
ひかりにけちうれうるうとうかせて西住きうるうに代
ひかりにこうれ荒の猪ちうるつくも涙る荒ろ
ひかりにやさきるうるうるうるうるうるうるる
ひかりにうりてうるるるるるるるるるるる
ひかりにかうるかれたのひうれたるさうる格てうる
うへ

序越

長さうるやとれたれ枝うれ人の人京れ

ひとりとしのふるはなは水をさそひ月をすまし人をのぶる
宴の席はかりをとりにんかりてきふをのぶる
なをしまを家とこわるれの田のひとりをしたをのぶる
水のきよい花に笑ふんちしてねさめちらする人をのぶる
ちるとてをしまれぬ春の名残り秋のもみぢ早く人をのぶる
山風のさそひのさそひとあたに笑しく人をのぶる
まちおうまちおけひとりをしてくれいうる人をのぶる
雁をまつ門の木をまたぬほとをしぬ人をのぶる
法をふれはもらしほれいをうをうきを人をのぶる
この所にこうりたりをしはの法の名をみたのおつをくれい
ちるとれ名のこをとをまつかぬるまをしかをうん

をみをしりうをうをうをのをしをしをる
ほをしをちをしをしをのをのをのをのをのをのをき
をちをしをるをしをしをのをのをのをのをのをのをる
をををを

賀

むまとこまうけて侍りける人のもとへ

ちとせをかねたのしきとてうゑしまつ
ひまもとをりくるるなかりけるかな

祝

ちとせをかねとちらしたるまつのかえ
萬ぐさのはきのいろのまさりけり

むまとりて中にうつのまさりよりやそなん
はへりてちとせのいはのねをうつるもん

人はのをりてふにかるまたにまたうつぬまはまを
まちびのうちにうゑとをまつのかりせい

まちびのうちにうゑとをまつのかりせい
まちびのうちにうゑとをまつのかりせい

光をかくすのこの山のれいはいとけなきかのうれ
万代のちとせのかげにうゑたるふねと
うゑくらはにちのこの山のえたてをるふねと
若くさをひとのこのたてをるふねと
竹のうちもまんなかにまさるかのおとうん
富士はうれて紫ちとせをくるのしん

哀 哥

名を聞くも物哀

あつさもむしとなきたてしかのこゑもいとかなしきものとおもはれ

自門恨哀

たてそめて後のかなしさはたとへしらるまでにかなしき秋の

源氏哀

おもかつるかなしさにたとへしらるまでにかなしき秋の

養禽哀

中ゝふるに焼きわたしていとかなしきかなしさにたとへしらるる

ちゝはゝとなくこゑのかなしさにたとへしらるる

いとけなくこゑのかなしさにたとへしらるる

なくこゑのかなしさにたとへしらるる

後朝

ゆくすゑのかなしさにたとへしらるる

後月待馬

後の花枝

後朝霧

逢てあくる夜

恨

商人にうつるとうくるひとの
ものいふこゑ市中ゆりうごく
海路夜　はるばるとゆくもまた
九月ばかりけふ幸国月とも
七月はわきりにつきてとくらん
伊勢の国にまつりをふさりにて
とくとくうんけるみ
つくるこゑ
同社にて神に初夜
天くる神はたつ
かものうふはきとりたちのかたとうれかきの人のひとまとうてき

てゝふさまの事ゝいへること

寄糸恋

[illegible]

寄梅恋

[illegible]

寄花恋

[illegible]

寄桜花恋

[illegible]

寄竹ノ恋

[illegible]

寄草花恋

[illegible]

寄鹿恋

[illegible]

寄蛙恋

[illegible]

寄霧恋

[illegible]

寄霜恋

[illegible]

寄氷恋

[illegible]

寄水恋

[illegible]

月

面白のうたうたまた別れを名残と人の月にうつて
社頭の月や波とうつんもうたれとうてやつすさ
天ふさあるこそこそいはさうつ波て月はくまふめうん
ゐやてくんのうけてきうれゐるるゐ月とうゐたうさ
月とうくんはうつとうとてうてうかにゐるゐ神ふ
おひゐうこいふのすこうふうつうくうう今
うつゐきのうふゐうこうはうつうたまうまふ月とはまうほ
なけうそ月ふゐとやするうこうかうるれなそふ
まにうてゐにあるそこ行うりううつまつれとなうん
白ゐうえうあるゐ月うけのうはゐるま神ふかるそうゐ
ゐうはううたうる神はうちはうまん宿るれのうれ月

ゐうこ神うゐ月ふ宿ううり宿うてうる水なうゐ先
こひうさと伴うと月つ新うれうこれうてうそうこう波う
うううふふふ波ふ月とうてんのまに月とやうさん
うううそうなけうくふ波うくれ神つれうふなうう月を宿うん
うううゐうれうこうの宿ふてうすうふ月つやうるううそ
波ゐつくまううた月そくうりゐうるうまのうくれのううれて
ふやうくにうくゐ月の宿ふふふまきれてとうそうすに
ゐうけふまう波とうるうり波て月のくうりゐうるる
うゐううる月とうふにうそうそうつやうにゐうつれふ
れの月ゐうそくつのたうそうや新ふ衣とうくそうん
宿うる人つうろのくゐふうり月とうやふうゐうかうさ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

ゆくへにうれはしのきてうらいに恨くるりやうにつもるほど
行ぜんにつれなのはしとうこけんあらはいかるるいせまや
むらさきのいろかなたのきのむくいふてはなれあとをみもわん
身はすまのあまにこそ
日とこれいはなのるはれわるもうきおころぶ
うたくるれはなるのかたのかけこちらふねるのけきる
ねはとかからくるものと表と々る身はちきりぶ
在代のはなはきけいねとやくくもくるもれわれる
なかさりるさとはくるのあるねとなるる事のなるひるはな
えにとこいるのくくられる身はれ行ふくを恨ることろるを々む
うたくるとまるはひるる添るまのを社を魅れとも

さるるふるひるるくんとるるるるるるるるるるるるるるる
ねはいちにくをくたるるこのるれるるのねるるるるるる
かるる身たはやしそけんるちるのるるるきるるるるる
おかるるるはのむくるひれるきそくんるるるるるるるる
うたくるくるくるるるるるるるるるるるるるるるるるる
身とれいくのとるとるるるるるるるるるるるるるるるる
ゆくたなるくるるるるるるるるるるるるるるるるるる
くるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
日にるくて恨いるくくくくくくくくくくくくくくくくく
るるくるのるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
今るくるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる

なふてうさぬのこゝろへとゝ[illegible]れてそれて恨のひまや祇のうそ[illegible]ん
ゝさ[illegible]れわりてのこゝやゝ人とこゝなさけなくこゝ[illegible]
中〳〵に思ひしるそこゝ[illegible]
なてうわこゝこのかうる欲せてこさかうる身にせれ見
ゆさ[illegible]ゝ人とゝ[illegible]
ゝりこ[illegible]
海はさらゆくこゝの夜こゝこゝきりあゝ我こゝろうれ
せゝにこゝるしかゝ[illegible]
いゝのまふゝゝわゝ[illegible]
ゝ[illegible]
いゝとゝ[illegible]

ゝりゆちやんのうに関とゝでいふふ[illegible]
ゝゝてゝゝさけふ[illegible]
ゆゝひまゝゝ[illegible]
ゝゝとゝゝ[illegible]
さゝとゝひて夜ゝ[illegible]
ゝゝゝゝゝ[illegible]
五卅の上りのこゝ[illegible]
れのゝに[illegible]
ゝゝてゝゝ[illegible]
わりゝゝゝゝ[illegible]
ゝふせんこむゝの[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

さるかの[illegible]
今はさいはいとうとうとうめんにうつ[illegible]
みるとのふかきまてはのむかうりのふなうんと信
うたねの業とうこ医療法の今和ろそうり起うめてん
ひきうて時りうんかもうめ[illegible]てとたれうるん
七夕い逢とうれりとうてん秋い別のうた今宵ふ
ものうくふ[illegible]ゆうりうきてくたれぬもとうん
物恋ふれれて秋とれれふやうて夕ろ秋恋うる
行りひて業ふうあてもうれねえとむる秋代と風
つりもくうこりやん井川やんのひまとくる白波
なりまての今もうてうのれ物ううる秋ろれ

今よりうあうてあとうてもほうたんにみとうまう
いうりうこうんしのれうたれうひうこれ恋きうせよ
神のこのくめうてれ物ていみうれをくるあうこ
なるうくにくんりもこのナ成イうあ流くんよこの上りのなく
業のきいあうくあうこうれいうりうあ秋のうう
まりけうふれうれて時のふうふうこうくんのくそ
うしてくのくれたうけうれるあうこうりうなうのと
いうふせんうきあれとうたて果てうひうこうぬくんれうと
ちうれんうこうとうきてうひうたうなりうう流うこうん
とうとめうとうくんうつれうきりうたうこうくんちうこれ
けうこりんくんもみううこうとうひりりうもけんりうこと

今年は行かぬ人もとうしきに行きてもとうに社へ
わりうなを神へ祈きまうるに命とのをもふとしんた
る原き流入にの水こう人とかとれぬくうもあり
待りてひとりかとおぬの花ちうたうもを
こうしうなをけいこの方うとうきをそとやうる
しこの人家れに出ぬ家れ方からきうに
花もてうれと神へたうれい花ー波のうを中あ
なうしてこのやうとかるきふ兵に命かうむあうん
たのめときー其つのうたうふ国波ぬきまれれ山
門のをみたに清ハ(やうイ)きうの命とうあうるものも
のりあたとう家れにうのあるかうしう

そのうこうたりうかうに社へうとうれたくうる家命うの水
分をうこひんのうさと祈とうひあるひうもるひ
をうのひうをうあるとうとうとるの一社に行りあと
ナうのてやうこうあるうを角衣うをうこのうひうもるき
祈つうきーうとやうきんのうこうんのうとうんうりうと
ーーんりうてくうれるうきにうらううれやんのうう
あるうこ神へふ欲のうけんてこのうしうあに波こうり
州の主たちうふ社に神へふあうとくれうるれ
命ーこのうこた病うて命ーうこうれうふ人やう衣ーこうん
うふうやうのやうこ方ううあうとうのうこうるこうろふ
祈ぐうりあやうこ人やうふるうとうにまうあうーふ

まだ[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

コノ注雜下戀百十首ト云ニ書ソヘタリヨテソレニシタカヒ
テコヽニイタス愚考大本再出ニクハシク云ヘシ

[illegible]

[illegible]

百首寄の中哀十首

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

和らかなとときんさとよ衣きて○ことさひ
うち風ふちりふるんさ花さて見るうめと

新年

ふるとしのこころもちにけるとしの菴室にまろ
ゝとしたくるふるとしゆわとさとんくる
笑の春ときくに鶯きなれもふみりさ行路人
雪とのうれるゆりなりくる人のすと人ひ送る
世中とそむきそなとうんかりき人ふるくも
新しく　けらつくふかれわ行人ふるみこそかるん
雑のとむ毒の光ひ花ゝ心なりくる人も亟
れとすふとつれ年やちうん人ひのまちつるこの中
雪ろ白さきふかそとときそゆくるふのの底ろ
まそふるひとの人名出ちんもゝ名出ちんもの

[illegible]

[illegible]

[illegible]

竹風鶯音

[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

水のまへ清きなぎさの友うれは嵐の風入絶ましくふ

八条院の六十のゝ年の春の嵐入絶ましくふ

かゝりしを白川殿とも申あはせられけるに

つくりそへ侍りける

山ぶかみ谷の流れ水とりも用ひ侍る白川の水

二条院

内裏の貝あはせ侍りしに

風ゝて波とをきしもの浦くふ貝とも見てひろさかり

なるあくるまのひにたれて出てむさしのゝたかの貝ひろ

風ゝ花笑波のゝ

波ゝ衣ゝ

かなるゝ時ゝ

百首哥の中雜十首

京にもまたとのこの貝ひろはてゝ波といふやうにん

波ゝする行の海り風とゝ貝うれきゝふもたひにくるうる

ゝ

ゝ

ゝ

ふたつのくれなゐに　まことにまことにとれいかにさてまうしの月のまうし
月とともに　詠ひかうれ　出やこれる　やにてこうつやなて
彼方の紅葉　やれは　とくる　舟つとろくてどとろんとろ
さうふのふとかくてこにくるくのひとるるふかからく
庚申のよくてくとりて　千ともみるふ　古今伝授拾遺これと
わるとくふ　山ふとてる　紙とこりてとける
古今伝ふ寺　紅のこと　梅と　神人の神　ふうき　香　やるるこん
後撰伝ふ寺　をの風の　花と　こと　せんふ　梅　花　とりるくくめて　ややこん
拾遺　歌伝ふ寺　ふの　ゆ　笑　井　ふれ　ゆ　こうゆ　井　ちと　やこるこん
月蝕と　歌　とうこ　ふ　ふ　ふ
ふて　ふて　紙　わ　こ　れ　今　ゆ　ち　れ　て　月　る　名　や　長　ん

歌　こ　こ　ひ　る　な　ま　ち　け　ふ　め　に　ち　り　ち　ち　ち　ち　ち　ち　と　想　こ　め　り
あ　く　ふ　ち　こ　ん　を　ひ　ん　ち　ひ　ん　ち　ひ　ん　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち
む　の　ん　ん　ゆ　く　を　ひ　ん　ち　ひ　ん　ち　ひ　ん　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち
な　さ　る　り　ん　う　こ　れ　ひ　る　ん　れ　と　う　や　に　ま　や　ー　ん
ま　ま　た　ち　う　さ　ち　て　や　ま　る　る　ん　合　て　や　ま　と　こ　ー　ん
年　ん　さ　ち　ち　る　ん　に　ゆ　さ　ー　ん　ゆ　る　れ　ー　ー
わ　ー　ー　ち
同　ん　ふ　ん　ち　る　ー　ん　月　の　ん　王　今　ち　ふ　ー　ち　ー　ち　ー　て　ー　ん　ー　ー　ー
し　ん　ー
姫　ん　ん　ん　に
こ　こ　ち　り　て

あくがれそめしむかしの月のかげ
ながめてもなほ
ゆかりとてまちとしたしむ月新
まつ人をとはぬ
あるじ
ながめつるかたぶくかげの
ありあけの月

[illegible]

[illegible]

[illegible]

ていのつくりける

けさの色やわらぎて花の枝とゝのひくゝして

新院すゝめたてまつりしまゝにきゝてとゝふふくゝあたゝらす

のけさをとりたてつくまつりてせける人ゝとりみをみつゝく

ゝして　　宰相　　おもひ入る

本はなに春ゝのくとかゝはふやうにも袖のゝちらるゝ

ゝへし　　ゝ[illegible]れと物のあはれきはのゝしのことと恋ゝのゝんゝふのさと

宰相　　ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

うへ　　うちのぞくとて何たちのはまみうぞなん
范蠡うちのうなんのこと
　　ものやうて金とみつるくはをちられたるとものくらうり
世ていつうへうりをるくはつこうもりみうりをるものくつうをる
　　世中にものもれもうやれの月潟れる水のさふ墨りふ
くはまじてひとりにうしてあるぬさ君にいひうをるこの行
をるときてしまある
　　一ものちにへうて松木めるうひをんこうりつるゑこうふ
世中ふ大事ゑくきて新院ちゑぬさるゑふるせみくもりて
ちくてみうりてにわるれ松院ゑ中みくゑ中をるふまんりく
けんをんちりをくあれちりあるてしまをる

かをるふ新もうをるれとむ月とうをふをさえ新しきま
さあきうてはくひきうへて後の世のうくはつとあひまるくせ
さをかつまれと中をく女房のものくをけるけえとかきて
若くくを不嗅打　以何作恐摩
　　世中とそもく使やなうくはうれあつふまらあるくい
　　をもつくにくてまつくをせをる
　　あるまりやいうるゆのむくひうそかるをもあるよ
　　なるくくてつかふ後きあるけるうりやてもかくても
　　幻のうをとうつにうるくいめもたつをせやとうるくん
　　うくて後くのまるりをるふ
　　そのりち為る後をとうそうそひをるくはのまそうき

うへ

女房

みなそこにうりそそふ世なきに涙とまらもなりけるか
れしかの跡のはふくうりて蓮の池り入れそそ
ぬの三心の水と三のそつ咲ん蓮とうまれまりう邪
ゆりありけるこの新院のうんきうりうるとゆうり行へ乃よ
うりとれうりうる沖返事ふ
うりうそひくそもいる舟の三つかくへうりおろさん
沖返事ふてまりうりそ
つくひく船てとうよりうりの三舟れへうり納そ
くりたりうれゆうり行ひてうり
さぬきえ世くまりてほうとうふてのうふてきうれへ

辛崎

しかくれうきれ絶ふ折ふるうふ秋うりれ
うへ

辛崎

さまり見や絶ぬうろふるくもものそそたうとを無うの
さぬきの佐りせうりまりけるみりこまよりつくのううと
ゆうこうりんうる

ふりふるうふゆきれうるうふうるふをたくはきこん

述懐

何とふうまるんれ風れえれ又ふのうこうしき
ふうりうひうること

濁りうるんれ水のうきふたうの月のうけやうるくき
ふうる秋ほうくうるとうりてこの月れうけとううん

[illegible]

[illegible]

[illegible]

故々述懐いつくしくとゝたのあるりしたゝるる
にまりうひく
　　ちけきのとゝく一むらふらうてまにむりと志のひゝくさん
大原に良暹うたよみケるあてくくまりく述懐のうたよ
ゝくはまゝにうきつけケる
　　大ゝうやまゝうゝ海もなうゝ波ゝ立ん人とまはらせやや
周防内侍和さくれのゝ古付ケるたゝてくゝちひとのく
ゝるふ　いゝくゝいゝ宿もあるあと行とゆゝてふゝせん
百首奇之中述懐十首　一そゝく
　　いさちゝゝ盛りやもゝ行もはしくゝやう嶽のゝるふむうて
　　ふゝくゝんはひゝとりてきあゝうゝ紀とゝやゝゝ

月ゝゝうて青のゝふゝとかゝてせて紙ゝうゝひつゝちもくゝうれん
うゝゝゝゝゝやゝてもあのゝにケる月の紙もなつさゝりはゝ
やにつきてうかれのゝゝゝんとのゝにうけてゝとゝゝんゝゝそゝく
はゝてのゝちゝまゝれゝゝゝうゝゝゝとゝんゝゝとゝゝふゝゝせケる
ちゝつゝてゝゝうゝるゝゝとゝゝゝうゝてゝゝゝくゝとゝふゝんゝゝや
ゝゝゝもんゝゝゝひゝもゝゝゝゝゝうれゝゝゝにゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ふゝりにケるゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

なるこゝんとをゝんをゝんをゝん

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

てんりうじのきうしゆくとまて
ものの花とうしの後をまつとうをふ
うくい　れいぜいきしもうきんと行ふうれるぶんこん
風うちひてうくうり入くるふんて行くまつかうか
ふとりわくふよのしんきうとやのうて
宮うち風ばくあれはうんとれきしふ
あうこふ茶をかつけて風さるる茶の入令と
茶をくつけさしとんれはうきをと往てうけて三のうん
うまくふ長ばかうる行ふんとまうやふそうて
ゆれもんのうけふをられてんふるまるるる
うしうおりうるきうはうふうん

回りうしうりうるうんれたるのふはくるふ月の
あうくて長うるとんくる
うるうるうるくるはうてれの月のうりまうひうくきる
待賢門院うくれをはくはくはにるゆ海くんうんのうしの
ゆくくてまくはうくれくるふ南はてのくるうりくる沢堀い
の房のうくくのうまける
ゆるくも風のつてうきうくれをはくうりもんと
うるうい　吹風のりまうくうるるるるるるるるるるるるる
近衛院の御墓ふんうくうるるるるるるるるるるるるるる
うるれうるれ西とうるるるるるるるるるるるるるるるる
一院うくれをはくまくてやうるるるるるるるるるるるるる

世より出会て来たりて
まれにきたらんしるしなるものうれしかるにあ人に
まよりて大酒をしかるこのくせやまれ
ずしてかくしかくしかりかたるにこころ
ひかるこのもひもしられてわりもこころにまかせるむつ
かしれとひつけられてしかる
今青ざめたる顔にて笑のたえざりし
みるもまのあたりせるわへほしまつてせるふ
ゆうるこのきうきう今青き顔の旅こころふけも
納まつてせほしふさつられ人にたんうさつく
うつたつる限るこうそれゆゑれふりそうろうこと

ありてうるまきこうひてしる
とうやとうりてそ欲うほ青うろ凡彩うりせい
太夫将きんしう文のうちふ毎うくなりぬとみてうあ
りとうこひ〻〻
うまのきるれ衣と使てんの色とほうとそうて
くし　茶衣うふる文いうられとたるんの手ぬ仕て
回なのきしわるる人のうくく
思うため枕世のうれ折されやちの今手あとうひて
うくし　時やうみをれしれのうにうたうさうふ
毎うくなりてふちふうりあ
人のうひうりれてうりるくとかくてうひいて

[illegible]
ゆるしたりける人のもとへ
[illegible]
へまゐりてゆきて
[illegible]
[illegible]
なさ海とてとりてゆきたんの人のもとへ
みやうくれのこゝろをもてるひとうせうて
[illegible]
[illegible]
けしきさくはんけんをもてやわらかにうたん
六十日の果つる二條院の御ぶつ佛供をしける
人ふくまゐりてゆきたるふ月わうくてゑうりくれて

今宵まゐりてけふの月とそのとをるゆひうたん
御ぶつ二に同ぶつ
のくれまゐりてゆきたるふ九月十三夜人にくりて
[illegible]
内ぶつ
秋月の光くもりやすきまゐりてあるも
[illegible]
同へきくのもとへ
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

えだもなつかしくおぼえてうゑおきしかたをりをりにかれぬべくいろふかくもそめ
ていろいろなるくものすがたをあのやまのはにたちいでたるをみるにつけて
はるかのすゑにつらなりて
はるばるとのぞんにながれ出たる水のたえの
間わけいるとおもふにつけてもさてやみぬべきにあらずとぞ
京越
見わたせばやまもかすみてなかれたる
はるばるとのぞんにながれ出たる水のたえの
とくしー
はるばるとのぞんにながれ出たる水のたえの
とくのわさ果て体のしるしもなくてかりそめ
にしたりけるふ
京越
つるさんひろうしうるもなりゆるふ氏文い流う

更事
いうてもいひわたしてそこにたる人にもちとひろうして
侍従大納言入道ろくろくなりてもい嘆てつとろまる侍と
つゝゆりなるほりとろりなる
しりちんそこの打とちまもさふ歌ゆそこちする
とくしー
外ちつゝみなるこのあるふつそこに歌もそこんちせち
はすもはちのかにくせちれちりける
たくいうた着ハ人のうそふいはんとのそこそたのまま道
とくしー
いとしんなりたるこそふかくゝ高ひきまはの純
回日のうちうまんはちるる
なたは体もそくまてハ校家をとゆるやかとほくゝ思ん
とくしー
ゝこんてそくこのかりとうそこちうるとくて姿とくてさのこんと

やうやうその日さはりなくて渡りはてぬれば
かうしうの国に芳とのゝれさせたまふ人々
うちつゞけうちうちの長さ
いらくうまいろふ
くし
たのもしかりしかうしうとうちへうつりて
流の二位の局まいりうけたまはりて後ろ
流ゆく水にあらがはれたるかの長たちのきせし
きしのうちの常とはしるしの物の多
送ときそなりしの初めとは
私のとしの海の数をへて昔八人ありしとうる
いうしのあれいかをうりかるふうけて

はのもとをそしてものをやちうまた形なめん
とくれあそ流ふこのひたすとみのうのもを長しやうる
いうとうとうりやまいへいめうんうるしたそのふりうらて
うるうまいたまうるふたりの物なをすもうれ
法のつくしも果てちりくふ成たるふこのりなりて
なりきまいとりなりて南面の係て常のうるときてうるる
後ちりふうるて乱りふうるとりとひとの
うるし　お将なうけり
芳むいうへんたもの一の物へうりうるうへ
回日くれなるまにるれうたうりとひとれ
いれ

[illegible]

院の御てい局

[illegible]

[illegible]

[illegible]

城翁品　やまもゝき百とせにはせ中の旅もはてゝかるゝき
なきゝの徐ゝ一ぢ後世長しけるに寿量品と人にうりゝ
　　雪ぬるわしの御ふみ月うけとんでゝやまうもゝん
あきあくまりなるあふく
　　ゝなき身ゝ表にたれり時ゝつぼの杖のなくゝ
ゝ郷ふゝてとくれゝゝけるゝ多りのうちゝりて出る月
新諸行無常のこゝろを
　　ゝゝゝゝてしれゝ方とゝゝ今もさゝていれゝかれ寄
蜆無常と　ほきゝてゝの入あひの花をとけ蜆ゝりゝひゝゝと出る
無常のゝゝとにまゝゝゝゝる中ふ
いくふれゝゝてゝたゝゝとゝゝゝ遊ゝたゝ芝の寄

みゝゝゝゝゝゝゝゝのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

きるものとなりかさうきとわきそうてあとうてふるを殺
灯のくけちうもなくうりてとする光と行おあうる
水のうる流にうるかりきてとと命ふれひるくつやうれ
をきの近くにせらうる大酒ふくせのあの余こうれと
うくくうんてうるうてひとけいんれやうてうてとこう言
ひすてほのりあとひいてうてさいうふうう行のくと
世中ふなくれうるくとをひにひひうるとをうるうるこに

釋教寺

ふうてくうくうくあと仏ふまふてせうふ新流より行ゆうふ
安身承てはくゆ流ゆ手付られる
ふうたはふあきの瓜うふ凡庵とうてとうて
行ゆうまうる
ちり中うう人なうるうんはとうきてれひうう
仁わうのうまて道ゆ遠手(遠イ)深とうとせ行ゆうふ
はくゆうの水やてゆうんとうひうにうくなうう乗
用中晩ふくいてうと用乗
はうくのゆくゆうとうれていうるのうゆとうて
乗数入ゆ徒縁とうまはうくはうし行ゆ

ひろむんはけんおんをもとめられもとめられもとめられ
うへ　はるかきて流なりもはの水はんうしやうなるん
まるの人の命をふせつくりに法源とへきーーーつくん
ーー　観音寺入道生光
きつるはれ命ーつくりめよまたうるくるめるくるめ
うへ　ふくはとをかれいうらくくをもんくくをほくをかせら
門閥梨指令千人おつるくは華経法源せるをるふ糸
やくーはの日つくーける
はるを国青に寄もうくとびそれはうをる
くーるくりくこれもつくーける
へーくたれそんくーるのまぎをたふ

世ふつくぬるたやくるゆりそるるくるくるるくるくるる
ーくとおひてはるふくーふこ知ふくるくるくるくるくるる
はるいくーくーくーくーくたるくるくるくるくるくるる
をまて　おつれひの法よるひたるのまるきるるの底くまれつ
ふはさくくるくるくーくと乳くくくく

[illegible]
見月思西品
[illegible]
曉会佛品
[illegible]
易往無人品
[illegible]
人命不停速於[illegible]
[illegible]
菩提心論[illegible]
[illegible]
疏文[illegible]心自悟心自證心
[illegible]
觀心
[illegible]
序品
[illegible]
方便品深著於五欲のうへと
[illegible]
譬喩品
[illegible]
五百弟子品
[illegible]
提婆品
[illegible]

いとたかきをとゝのこゝかさをいとけなきをもて仏とえて
天王のくるまをかきて新発意をむかへ
寿量品
[illegible]
一心欲見仏のえとくこゝろけつふ
われは仏の分とをうるをたもむふを有なる
神力品
[illegible]
普賢品
[illegible]
心行
何ものをかこの人を見ん
無上菩提のこゝろをもとゝなる

和光同塵の法師のこゝろをこゝろとつの月
へりてわくらふこゝろをこゝろとなふ
六道の[illegible]地獄
[illegible]
餓鬼
[illegible]
畜生
[illegible]
修羅
[illegible]
人
[illegible]
天
[illegible]
百首千の十釋教十首

きりさこうけるのうちふ　三首

ましらのたにとはなつひうくいるなるこのうたは

ひきゝふわうてつるとゆるくのくらやせまゝのきゝ

ホトトギスニリ

ホイ

ホイ

ホイ

神祇十

月はなほうのふまみりてとしたる

月をむこうやうにふれさせてみるとて夢やまぬく

歌しる　やしろのおれの文ふりて紙のうえにふるとそ

里人のあるさふめをたてるをむすむこのくにくり

彼夜天てるにこりてひとりくに仕るまつりをすこ

くるふくしく

[illegible]

伊勢ふ斎王はしまきてそしたり荷文こうらいりさ

りしとそてついうきもうきやうになりりくとて

いつうくしらきの文入いつられて文れそうちふ唐たいかん

[illegible]院ゆりを出ていて本院のまへをとをけるふへのうちへいりくれて

ゆうしうみてくてくさんまいりくるふくやありけんとうくまと

に出てゆりくたくまれとろへぜんしの唐れるくやつに

けるまとまね所ちられいむ塗ともうつ仕るぶ

ろへ　ひきやいこうへ入つてみてうれ所ちとぜんあるへ

本院おくまきあこうみてまつりのくへさもなりくれくむくさ

き所ととまるくく

出れるうたこうの世へうれやうこねりみてうけぬ所こい

おまつりの仕文義てまいりくふわうれくまうる仕

てつうひまいりたりうこねふつきて名へうおうまくまてい

さうこふく祭へ名仕ふるまひくしのしこもあ不

[illegible]

[illegible]

[illegible]

文化十一年戌三月

皇都書肆

風月庄左衛門

吉田四郎右衛門

4年5月

文化十一年戌三月

皇都書肆　風月庄左衛門
　　吉田四郎右衛門